
緋弾と無限剣

カニカマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾と無限剣

【Nコード】

N7056W

【作者名】

カニカマ

【あらすじ】

東京武偵高2年の神代桜火と遠山キンジは爆弾の爆発を避けるためチャリを全力でこいでいた、そして誰かが落ちてきた。その名は神崎・H・アリア！？———できるかぎり定期更新の小説第1弾始まりっ！

10月27日から、1週間ほど停止します。

a c t 1 アリア編 1（前書き）

始めましてカニカマです。1週間に一回のペースで更新しますので
ご了承ください。

アドバイスなどは、コメントにお願いします。
見苦しい人はご退出お願いします。

act 1 アリア編 1

——空から女の子が降ってくると思うか？

特に大した理由はない。昨晚俺が、某ジ。リ映画を見たからだ。ただし俺は降ってきてほしいなんて思わない。もし、そんなことがあったら、何やら面倒なことが起きるからだ。俺は永遠にこの道を通ったことを悔やむだろう。

俺、神代桜火は東京武偵高へ近道を使っていた。武偵高とは、『武力を行使する探『偵』を育成する高校のことだ。時間は7時30分、まだ余裕の時間だ。俺はスピードを上げようとすると。

「おいっ！」

「キャッ！」

ガシャン

俺は不穏な空気を感じた。

「何かしら事件の感じだな…」

俺は、音のした方向にチャリを飛ばした。

そこには武偵高の女子生徒と思われる人物と、完全なチンピラがいた。

「あぁん？何だてめえは？」

まさか武偵高の制服を知らんやつがいたとは…

「ただの武偵だ」

俺はやる気のなさそうに言うとチンピラは俺を弱いと判断したのか——

「で？その武偵様が何の用で？俺はただ、ぶつかってきたやつにお礼をしているだけなんだがな」

女子生徒を見ると、少し血が出ていた。ここで俺の中の何かが切れた。SS、俺の体質だ。
サウザン・シンデローム

「おい、そのチンピラ」

俺は少し殺気をこめて言っ

「その生徒はお前に意図的に暴行を加えていないだろ？」

俺の推理が正しければ、この生徒は暴行を加えてない。返事がなのは肯定と受け取っていいと習ったしな。

「肯定と受け取った。お前を暴行罪の罪で逮捕する」

俺が言々とチンピラは俺をからかうように言った。

「逮捕だあ？お前みたいな餓鬼に何ができる？」

おおチンピラがガキの漢字を知っていたぞ。

「お前でも武偵のランクは知っているよな？…俺のランクはSだ」

本当はさらに上だけども、チンピラにはわからんだろう。というより自慢したくないんだ。武偵関連の事を。

「このクソガキがああああ！！！」

チンピラはナイフを持って突っ込んでくる。これくらいは軌道を読まずに回避できるだろう。俺は左に回避すると、女子生徒を抱えチンピラの首にナイフを当てた。

「これ以上やるなら。本気を出すぞ？」

俺の背中では13本のナイフや日本刀が翼のように開く。これが俺の2つ名『無限剣』の付いた理由だ。

「お前、まさか『無限剣』か？」

『無限剣』を知っているのか。武偵以外は知らないはずだがな…

チンピラが低抗をやめたので手錠をかけ警察を呼ぶ、これで仕事は終わり。そして俺は抱きかかえたままの女子生徒に優しく微笑みかけた。

「大丈夫かい？」

「だっ！大丈夫です…」

そのまま激しく赤面すると俺の手から逃れさつさと走って行ってしまった。そして俺はあわてて時間を確認した。時間は…7時45分。

「やべえ！遅刻する！」

俺はそれから約15分後に学園島の入ると俺のように自転車を漕

ぐ奴がいた。アイツは…キンジ！俺は走り寄ろうとしたが後ろから人の声ではない声がした

「そのチャリには爆弾が仕掛けられてやがります 速度を落としたり チャリから降りると爆発しやがります」

「何だと！」

まさかとは思ひ、キンジをみるとアイツもセグウェイに追いかけていている。少し速度を上げ、キンジに近づくと、キンジもこつちを見た。

「来るな桜火！このチャリには爆弾が仕掛けられている！」

「分かつてる！俺もその仲間だ！」

どうする…俺一人なら助かるが、キンジも一緒となると自信無くなるあ。しかもこの手口は『武偵殺し』。模倣犯ではないだろう、おそらく本人だ。

「キンジ！第二グラウンドに行くぞ！」

第二グラウンドなら、誰もいないだろう。そう思って周りの安全を確認した。すると第二女子寮の屋上にツインテールの少女が。キンジも気づいたらしくそつちを見上げてる。そしてそいつは…飛び降りた！？いや、パラシュートでこつちにむかってくる。

「ばっ馬鹿！来るな！この自転車には爆弾が——」

すると少女は太ももから二丁のガバメントを取り出した。

あいつのやりたいことは分かった。あのパラシュートで俺たちを助ける気だろう。

「ほらその馬鹿ども！さっさと頭下げなさい！」

バババババババツ！

俺たちが頭を下げるより早く2丁のガバメントで、後ろのセグウェイを破壊した。

俺はキンジ達から離れながら言った

「俺は一人で助かるから。そいつを頼む！」

少女は俺の言っていることが分からない、というような顔をした。だが分かったらしくキンジを助け始めた。

さて、俺はまずワイヤーを地面に打ち込んで刺さっていることを確認し、チャリからジャンプした。そしてリールでワイヤーを巻き上げる。チャリは爆発したがどうにか生き延びた。…あのチャリ5万もしたのに。

そしてキンジと少女の安否を確認するために体育倉庫に行った。

…つか、爆風で体育倉庫の飛び箱に入るってどういう奇跡だ？

「キンジ、言い逃れはできないな」

キンジは見事に飛び箱にはまり少女の服を脱がしているように見える。

「そう思うなら、助けてくれ！」

「はいはい、分かりましたよ」

俺はそう言いながら少女を箱から出してマットの上に寝かせた。

「そいつの名前は神埼・H・アリア。そういえば、お前どうやって逃げたんだ？」

キンジは俺がどうやって爆弾から逃げたのかが不思議なようだった。

「ま、それはSランクの不思議ってやつで」

「いや、ぜったいSランクじゃないな」

俺たちが談笑していると。

バババババババババババババババババババババババツ！

7台のUZIによる大量の弾丸が俺たちに向けて飛んできた。

「あぶないな…」

キンジは首だけで弾をかわす。

「はあ、またか…。キンジ援護してくれ！」

「分かった！」

余談だが俺は弾を全て斬っている。

キンジによる援護射撃の中、俺は全ての弾丸をよけながら一台一台切り捨てていった。

「これでラストか、まだまだ弱いな」

最後の一台を切り捨ててキンジの場所に行こうとするとアリアが起き上がっていてこっちを見て何か言いだした。

「あんた、何者？7台のUZIの弾をよけるなんて人間業じゃないわ」

まあ、普通の人間なら無理だな。今の俺は、さっき女子生徒を助けた時に残っていたSSでどうにかしたからな。

「俺か？ただの武偵、強襲科のSランクの神代桜火だ」

「あんたもSランクなのね、そのあんたも、的確な射撃、SかAよね？」

アリアはキンジを見る。なぜか若干顔がイケメンに見えるのは多分、HSSが発動しているからなんだろう。つか、いつ発動した？
ヒステリア・サヴァン・シンドローム
「違うな、俺はただのEランク、射撃がうまく見えるのは前、強襲科にいたからだろう。」

このキンジはえらく謙遜だからな。実力はSくらいあるだろうに。
「まあいいわ。それよりあんた、わたしと決闘しなさい！」
はい？今何と言った？

「決闘ならお断りだ。相手になる奴がほとんどおらん」

俺は背を向けて校舎に歩き出す。念のために弾ばら撒いところ。
「待ちなさいよ！逃げる気？」

案の定追いかけてきやがった。しかも2本も刀抜いてやがる、こいつ双銃双剣か？そしてそのままばら撒いた弾を踏んで――

――ドーン！

あーあ踏んじやったよ。武偵なら足元くらい見るよ……

「キンジ、そいつ置いて行くぞ。」

「分かった。」

俺たちは教室に行くとなりの扉から入った。

「すみません、事情があつて遅れまし――」

「先生、わたしあの二人の隣の席がいい。」

「先生！私はあの金髪のお兄さんの隣がいいです！」

「よー、キンジ、桜火、やっとお前らにも春がkごふっ！？」

てめえは黙ってる武藤。

金髪はこのクラスには2人しかいない。そしてお兄さんと言えば俺なのだが……あの女子生徒の顔どこかで……っとそれより！

「「アリア！なぜお前がこのクラスにいる！」」

クラスの武藤以外が俺とキンジの顔を見る。

「あら、言つて無かつたつけ。わたし、2年よ。」

は？このチビは何を言っているんだ？中学2年の間違いじゃ？

「あれ？『無限剣』のお兄さん、私には気づいてくれないの？」

って！アイツはさっき助けた女子生徒じゃないか！

「頼むからお兄さんはやめてくれ！俺の名前は神代桜火だ！後2つ名もやめてくれ！」

あれは学校でばれるとヤバイんだって！

「はい理子分かっちゃった〜！転校生さんはしんちゃんを『無限剣』と間違えちゃって、ツインテールさんはキー君としんちゃんを取り合いっこしてるんだね！」

取り合いっこってなんだ。後、ほとんど間違えてるぞ。

そつえばここは馬鹿の吹き溜まり、武偵高。

そこでクラスは大盛り上がり、説得のしようがない。

「まさか桜火まで？」「絶対そんなことしない人だと思ってんだけどな〜」

「お前らなあ……」

ババン！

突然鳴り響いた銃声が教室を凍らせる。

「恋愛なんて……くだらない！」

武偵高では銃は必要以上に発砲しない。と、いうことになっている。つまり、してもいい。まあ、ここの生徒は日常茶飯事に銃弾の飛び交う武偵になるうというのだから軍人並みに神経を麻痺させておく必要がある。だからと言って、自己紹介で発砲したのはこいつが初めてだろう。

「全員覚えておきなさい！そんなくだらないことをいう奴は――」

「それが、神崎・H・アリア全員に向けて発した最初のセリフだった——風穴開けるわよ！」

昼休みになると質問しにくる馬鹿どもから逃げるために強襲科の屋上に来ていた。キンジも同じなのだろう。理科棟の屋上に姿が見える。

「あ、お兄さ——桜火君ここにいたんだ。」

不意に後ろから声が聞こえる。この声は……あの時の女子生徒か。そっぴい名前聞いて無かったな。

「んで、何の用だ？」

その女子生徒は黙って話さないでいる。

こっぴいこのってきついな、あまり女子と話さないからか。向き直って話を聞こうとして振り向くと、不意にキスをされた——

「ええええええ！？何してんの！？」

女子生徒はキョトンとしている。

え？何？俺が悪いの？

「落ち着いて、要件だけを話してくれ」

俺は女子生徒を落ち着かせようと肩に手を置いた。すると女子生徒は落ち着いたように話し始めた。

「あ、あのね……私の……マイの恋人になって下さい！」

俺、神代桜火は、人生初の告白で、驚きのあまり意識を失った——

2（前書き）

すみません、桜火のプロフィール出してなかったですね。

神代 桜火

通称、『無限剣』 ランク、S 学科、強襲科

使用武器、C Z 7 5、オートマグ？、ナイフ×2（????？）、日
本刀×1 4（????？）

体質、S S（自分以外が傷つくことによって発動）、不幸

俺は気が付いたら知らない部屋の知らないベッドで寝かされていた。

確か俺は…マイに告白された↓人生初のキス&告白↓驚きのあまり気絶。…何やってんだよ、俺…。なぜか寝ていられず起き上がると。急にドアが開き、キンジが入ってきた。

「気が付いたか、桜火。」

キンジは心配していたのだろう、枕の横には水の入ったコップと水筒があった。

「ああ」

「ならよかった。いきなり教室に1年のマイが看護科の連中とお前をかついでくるんだ、すごく心配したぜ。」

まじか…あいつ1年だったのか。…看護科にまで迷惑かけたか。ほんと駄目だな、俺も看護科も。なんで教室何だ？保健室でいいだろ。

「んで？マイはどこだ？少し事情を聴かんといかん」

なぜ告白したのかと、なぜ俺なのかの理由だ。いきなり告白されてこっちは気絶までしたんだ。聞く権利はあるだろう。

「アイツは今リビングにいるよ、呼んでくるか？」

俺がいま動けないからな、キンジに頼むか。

「ああ、頼んだ」

マイは寝室に入ってくるといきなり謝ってきた。

聞けば、俺がチンピラから助ける前に俺の事は知っていたそうだが、そしてその俺がマイを助けた、そして最後の笑み、これがいけなかったらしい、これでマイは俺に一目で惚れて2年の転校生になろうとした、というものらしい。最後以外はよくある話だ。

そして俺は本題に入った。

「マイはもう知っているが、キンジ、俺が『無限剣』だ」

「お前が『無限剣』だったとして俺にどうしろと？」

「お前ら、ぜったいに俺が『無限剣』だってこと話すなよ。要件はそれだけだ」

「それじゃあマイ、お前はかえっていいぞ」

「はい…」

話に入れなかったのが悔しいのか、マイはうなだれて帰っていく。

「つか…お前、いきなり後輩に告白されるってどういうことだよ」

それに関しては何も言えないので正直に言う。

「さあ、知らん」

ピンポン

何か嫌な予感がする…

「キンジ、あれは開けないほうがいいと思うぞ」

開けに行っていたキンジをすんでのところで制す。

ピンポピンポピンポーン

やっぱり嫌な予感がする。

ピポピポピポッピポッピポッピンポーン！

なんか某ボーカロイドの歌みたいになってるよ！

「ああもう！うるせーな！」

キンジが切れて玄関に行った。キンジ、ご愁傷さまでした…

——誰だよ…。

扉が開く音とキンジの声が聞こえてくる。

——遅い！あたしがチャイム押したら5秒以内に出ること！

やっぱりアリアか…！

——桜火もいるわよね？連れてきなさい！

おいおい俺も、正直むり——

——無理だ、アイツはまだ動けない。

ナイスだ、キンジ！

——じゃ、どこ？行くから。

え？まじ？

——右の寝室…

教えるなよ…！！

「ここにいたわね桜火、キンジ。あんた達！私のドレイになりなさい！」

今ここに俺の不幸な物語が始まった。

………

………

………ありえんだろ、こいつ。いきなり俺に決闘しろなど、俺達の隣の席に来るなどわけがわからん。

「ほら！飲み物くらい出さないよ！」

ぼふっ！

アリアは盛大に俺の上に座った！

「コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！砂糖はカンナ！1分以内！」

「その前にどけ！」

ありがとうキンジ、もう少しで潰れかけたよ…

アリアとキンジがリビングで怒鳴りあっている。ああ…また嫌な予感がする…

—— 出てけ！

ああキンジお疲れ…と思ったらアリアは俺も外へ摘まみだした。

俺とキンジは下のコンビニで時間をつぶした、さすがに立ち読みだけでは悪いと思い、キンジは漫画、俺は甘いものが好きだから、ももまんと、キャラメル、カル。スを買って家に帰った。家には普通に入れた、だが俺の嫌な予感レーダーが鳴りやまない。リビングに明かりが点いていないことからリビングにいないことは分かる。だが後は風呂しかないのだが…

ピン、ポーン

ヤバイ！この感じは2年C組の星伽白雪！

俺はキンジにアリアの武器を回収するように言い、自分はドアのぞき窓から外をうかがった。

「んん？何だ？こんな時間に？」

俺は平静を保ちつつドアを開け用件を聞いた。

「こんばんは、桜火さん、きんちゃんはいますか？」

きんちゃんとはつまりキンジのことで星伽とは幼馴染だ。

「いまアイツは部屋で銃の整備をしてるよ」

「そうですか…それじゃ後できんちゃんと食べてください」

「ほいほい、了解した」

「えっと…今日の爆破事件、きんちゃん達だよね」

なんだ、そんなことかと内心で安心する。女の匂いがする、とか言われたら俺は逃げるところだった。

「ああそうだが、何？」

「怪我は無い！？きんちゃん！」

—— ああ大丈夫だ。

一応声が聞こえる。

それを聞いて安心したのか、白雪は帰って行った。

2（後書き）

今回は、短めです。ごめんなさい。でも、ちよくちよくあげるので、ご了承ください。

3（前書き）

今回は、マイのステータスです。

マイ

ランク、C 学科、強襲科
使用武器、ダブルイーグル、ククリナイフ
体質、ネタバレになるのでまた今度。

翌朝、俺は顔が陥没する音を聞いた。

「いつまで寝ているのよ！ご飯、出さないよ！」

「そんなものはない、リビングにももまんがあるからそれでも喰ってろ」

俺は忌々しげに言うと、アリアは飛び上がるような速度でリビングに走っていった。

——なんだ、アイツ？ももまんがそんなに好きか？

一瞬そんなことを思ったが無視した。そして俺は、反対のベッドで俺と同じく顔が陥没して気絶しているキンジを起こした。

「キンジ、気絶してないで起きろ。7時58分のバスに間に合わないぞ」

キンジは起きていて、あえて無視していたらしい。

「ああ、分かった。おーいアリア、登校時間ずらすぞ」

これ以上俺達の評価が下がるときついからな、俺の人生的にも、キンジの転校的にも。キンジ、ナイスな判断だ。

「なんで？」

「なんでも何も俺達がお前と一緒に出ると厄介なことになる。ここは一応男子寮だからな」

「うまいこと言って逃げるつもりね！」

「同じクラスだし、俺達は隣の席だ！逃げようがないだろ！」

言っただけの自分の不幸体質が嫌になってきた。事実だからしょうがないが、誰かどうにかしてくれ。

アリアはむううううとほっぺを膨らましていた。

「そんなフグみたいに膨れても駄目だ、別々に部屋を出るぞ！」

「やだ！逃がすもんか！キンジ達はあたしのドレイだ！」

「いつから奴隷になった！俺は了承してないぞ！」

言っただけ俺は腕をかわす、キンジはとっくにつかまっていた。

「は…な…せ…この！」

「キンジ、頑張れよ！」

キンジには悪いが先に行かせてもらおう。この時間なら7時45分のバスに乗れるだろう。

「おい！逃げるな！」

キンジ…すまん！

俺はベランダからワイヤーを使って降りた。ちょうどバスが来たようだ。キンジ達は――

――はなせ！この！

――がう！

まだやってるのか、部屋から声が聞こえる。

俺は一般科目の授業が終わってキンジとクエストに行こうとすると、アリアが探偵科の前にいた。

「なんで、お前がここにいるんだよ！」

「あんた達がここににいるからよ」

まったく答えになってない。

「おい、強襲科の授業、サボってていいのか？」

キンジがキレ気味に言うと、

「桜火はどうなのよ、あんたも強襲科なんでしょ？」

俺はただ、キンジのクエストを手伝いに来ただけなのだが…

「俺はもう6年分の単位をそろえているから大丈夫だ。それでキンジのクエストの手伝いだ」

俺が状況を説明すると、アリアは不機嫌そうな顔をした。

普通、校門で女子生徒が待っているとなると、全国の高校生には嬉しいシチュエーションなのだろうが、相手は事あるごとに2丁拳銃を振り回す凶暴女だと、このシチュエーションは不成立だと言わざるをえない。

「で、あんた普段どんなクエスト受けてるのよ」

「お前には関係ないだろ。Eランク武偵のお似合いの、簡単なクエストだよ。帰れっ！」

武偵高の生徒は、一定の訓練期間を過ぎると、いきなり民間からの依頼を受けることができるようになる。町で事件の現場に偶然居合わせたら、そいつを解決してもいい。

で、それらの実績と各種試験の成績で、生徒にはA〜Eの『ランク』を付けられる。その上にはさらにSランクという特別なランクもあって、キンジは入試の時Sランクに、俺は実力でSランクに格付けされている。

まあ、キンジの場合…白雪のせいで、HSSのなつてたからなんだよな。

「あんた、本当にいまEランクなの？」

「ああ、1年の期末試験を受けなかったからだな。ていうか、俺にランクなんて関係ないからな」

「そっちのあんたは？」

アリアは、今度は俺を見る。

「…Sランクだ」

「嘘ね、UZIの弾幕をよけるなんて、わたしも出来ないもの」

「じゃあなんだ？俺がランクを偽装してるとでも？」

「噂には、さらに上のRランクっていうのもあるみたいだけど…」

「それはないな。俺はただのSランクだ」

「まあ、ランクなんてどうでもいいけど。で、何のクエスト受けたの？」

「お前なんかに教える義理はない」

「あんた達、風穴開けられたいの？」

イラッとした表情のアリアが、拳銃に手を伸ばす。

「……………今日は猫探した」

これでアリアが興味をなくしてくれるといいのだが…そんな簡単にはいかないか。

「青海に猫を探しに行くんだよ、報酬は1万、0・1単位分、参加

人数は最高2人、募集科目は強襲科、探偵科、情報科、あと狙撃科だ」

キンジが極端に説明を省くので、俺が説明を付け加える。

まあ、キンジの事だ、探偵科の中で一番簡単で一番地味なクエストを選らんだのだろう。

「面白そうじゃない、わたしも手伝ってあげる」

は？今何て言った？

「話を聞いて無かったのか？参加は最高2人、俺とキンジで満員だ」

「いいから、あんた達の武偵活動を見せなさい」

「断る。ついてくるな」

「そんなにあたしが嫌い？」

「大嫌いだ。ついてくるな」

「もっぺん『ついてくるな』って言ったら風穴」

風穴は開けられたくないし、何度言っても付いてきそうだったので、もう諦める。そのままアリアを引き連れ、青海へモノレールで移動する。

「で？猫探しって言うけどどういう推理で探すの？」

「別に、桜火に任せる。アイツは猫の行きそうな場所を瞬時に見分けられるからな」

「というより、俺はそのためについてきた」

俺は、猫が大好きだ。犬はどうも苦手で、触ることもできない。

正直猫を飼いたい。ただし寮はペット禁止だし、飼ったとしても流れ弾で死にそうだからいやだ。

「そついうお前は、何か考えてきたのか？」

俺達はアリアに尋ねる。

「推理は苦手だわ、一番の特徴が遺伝しなかったもの」

アリアは一瞬何か悲しげな表情をした。俺の気のせいかな？

「ていうか、おなか減った」

「さっき飯食わなかったのか？」

「食べたけど減った」

なんという体の構造しているんだ？

「なんかおごって」

「いきなり脚引つ張りやがって…」

そういえば、キンジもクエストを選ぶのに手間取って飯食って無いな。

「それじゃ、俺が金出すから、なんか買ってこい」

「すまん、いつも」

俺は財布から5000円札を取り出してキンジに渡す。

「大丈夫だ、お前の財布の事情は知っているし、俺も金の使い道がないんだわ」

俺は、6年分の単位を取ってるせいで、財布の中に10万、銀行に7億ほど預けている。腐るほどあるってのはまさに、この事だな。

キンジはアリアに言われてギガマックと、自分のメガマックを買ってきた。

俺はマックの前で待ってたが、アリアがいない。遠くを見ると、アリアらしき人物が高級ブティックの前でマネキンを見ていた。

なるほど、ああいうのに憧れているのか。

「おい」

「——あ」

何が、あ、だおい。

振り返ったアリアは俺達が含ま笑いしているのに気づいたらしく、ぼんつ！と顔を赤くして手をぶんぶん振った。

「——ち、違うの！あ、あたしはスレンダーなの！これはスレンダーって言っの！」

「まだ何も言っただろ」

「っっていうか憧れているのか？」

そしてキンジ達は、反対側の公園に入っていく。俺はこの公園に猫がいないことをさと、公園の外で待っていた。

俺は、この公園が嫌いなんだ。

中を見ると、中はカップルまみれ。俺の苦手な空間だから俺は入らなかった、それにアリアも今気づいたらしく、ボンツと顔を赤くしている。

—— あ、いまアイツ、キンジのコーラ飲んだぞ。あ、吐き出した。何故、キンジが殴られた？

「よし、おとなしくしてろよ……」

公園から出た後、俺達は運河に来ていた。そして予想通り猫を発見すると、猫の救出に向かった。

「よしよし、いい子だ……」

そして、俺たちの猫さがしは終わった。

3 (後書き)

すみません。マイはこれから少しずつしか出ません。

4（前書き）

今から1巻の終わりまで一気にあげます。

猫探しで0・1単位貰った——その翌日。

「理子」

メールで呼び出しておいた通り、理子は女子寮の前の温室にいた。ここは人気がなく秘密の打ち合わせをするにはちょうどいい場所だ。「キー君！しんちゃん！」

バラ園の真ん中で理子がくるつと振り向く。

俺は理子と昔会った気がするんだよね……

「相変わらずの改造制服だな、何だその白いふわふわは」

「キンジ、あれは白ロリ風のアレンジだと思うぞ」

「分かるお前が怖いな」

俺が知っているのは変態だからではない、理子に散々教えられたからだ。

「しんちゃん分かってるー！キー君いい加減ロリータの種類くらい覚えようよ」

「丁寧に断る。お前は何着改造制服持っているんだ？」

指を折りながら数を数える理子を無視して、俺もキンジもバックの中から、嚴重に包装されたゲームを取り出す。

「理子、こっち向け。ここでのことはアリアには秘密だぞ」

「うー！らじゃー！」

理子は両手でびびつと敬礼(?)のポーズをとる。

苦い顔で俺達がゲームを渡すと理子は息を荒げて袋を破る。まるでケモノだな。

「うつつつつわぁー！ー！しろくろつ！」と『白詰草物語』と『妹ゴス』だよー！そして、しんちゃんからは……『あかね色に。る坂ぽーたぶる』と『ましろいろシン。二m u t s u n o - h a n a』だよ！」

ぴょんぴょん跳ねながら理子が振り回しているのは、R - 15指

定のゲーム、いわゆるギャルゲーというゲームだ。

まあ、ギャルゲーはスルーして、呼び出した理由は、アリアに關してだ。

なぜ俺達を奴隷にしたがるのか、についてだ。

「まあ、そのゲームはやるから、アリアについて調べたこと、きっちり話せよ。」

「——あい！」

理子はネット関係において武偵向きの趣味を多く持っていて、さらにランクはAだとか、まさに情報の怪盗だな。

「まずは強襲科について——」と思つたが、後で桜火に聞いたほうがいいな。じゃあ、あいつの実績とかは？」

「それなら、すごい情報があるよ、今は休業しているけど、ロンドン武偵局では、99回中一度も犯罪者を逃がしたことがないんだつて。」

「いちども…だつて？」

武偵に回ってくる仕事といえば、警察の手に負えないようなやばい奴ばつただ。それを99回連続でだと？

「あーじゃあほかに、体質とかは？」

「お父さんがイギリス人とのハーフだね。」

「てことはクォーターか。」

「あとは…H家の事かな、イギリスのサイトググレば一発で出ると思ふよ。」

「…俺は英語駄目なんだ。」

本当は、知ってるがな。

「ははは、がんばれやー。」

理子の小さい手が俺の肩を叩こうとしてすかぶつた、そしてキングの腕時計をはたき落した。

「うわあ！ごつめーん！修理させて！」

「まあいいけど…」

「ほかは、何かある？」

理子は制服の胸の部分に時計をなおしながら聞いてきた。

「いや……いい」

キンジが唾を飲みながら言った。

ああ見えたんだな、あの金色が。

マンションに帰ると、アリアがいた。

……どうやって入った？

「遅い」

俺は愚問だろうが聞いてみた。

「どうやって入った」

「わたしは武偵よ」

ほら愚問だった。

カードキーを偽装したのだろう。鍵開けは武偵の基礎だからな。

「お前、今まで一人も逃がしたことがないそうだな」

「あら、わたしの事調べたの？でも——」

アリアは壁に背を向け蹴るような動作をした。

「——この間一人逃がしたわ。生まれて初めてね」

「へえすごい奴もいたもんだな。なあキンジ」

「ああ、誰を取り逃がした？」

理子の情報にも間違いがあつたか。

「あんた——桜火よ」

俺は驚きのあまり、思い切りむせた。

「げほっげほっ、なんで俺だよ！俺は犯罪者か！」

「犯罪者じゃなくても私から逃げたのは、あんたが初めてよ」

もう俺は何か言う気が失せていた。

キンジ、変わってくれ。

「とにかく！あんた達なら私のドレイに出来る気がするの！強襲科に戻って、あの弾をよけた実力もう一度見せてみなさい！」

「あれは……あの時は……偶然に避けられただけだ。俺はEランクの大

したことの無い人間だよ。残念でした、帰ってくれ」

「嘘ね、1年の時、あんたはSランクだった」

やはり、武偵は情報戦。そこを握られると、やりにくくなるのは分かる。

「つまり、あれは偶然ではなかった！私の目に狂いはなかった！」

「とにかく、今のキンジには無理だ。帰ってくれ」

「今の？ということは何か条件があるの？言ってみなさいよ。協力してあげるから」

協力するな！協力するってことは、キンジに『性的興奮』させるってことだ、とても無理だ！

「無理だ！キンジのやつは協力して出来るようなものじゃない、帰れ！」

キンジが外を見て何か考えている。何をしているんだ？

「——1回だ」

「1回？」

そついうことが。一回強襲科に戻ってそしてチームを解消するのか。

「戻ってやるよ、強襲科に。ただし、組むのは1回だけで最初起きた事件を解決する。それが条件だ」

「……」

武偵高では自分の科目ではない科目も自由に受けることができる。これは自由履修と言って単位には反映されないのだが、多様な技術が必要とする武偵という仕事に就くため、生徒たちは割と流動的にいろんな科の授業を受けているのだ。

キンジはHSSがばれる前に、通常の自分を見せつけなければいい。そうすれば、何もないキンジに失望して、離れていってくれるだろう。——という考えなのだろう。

「いいわ、じゃあこの部屋から出て行ってあげる」

キンジの譲歩案にやっと——疫病神が出ていくことを宣言してくれた。

「ただし、どんなに小さくても1件だぞ」

「OK、どんなに大きくても1件よ」

「分かった」

「ただし、手を抜いたら風穴よ」

「ああ。約束する全力でやってやるよ」

—— 通常モードの俺でな。

—— 本気モードの俺でな。

4（後書き）

ゲームが実際にあるものなんて、気にしない。

キンジは戻ってきてしまった。

強襲科——通称、『明日無き学科』に。

この学科の卒業生生存率は、97・1%。

つまり、この学科の100人に約3人の割合で生きてこの学科を卒業できない。任務の遂行中、もしくは訓練中に死亡しているのだ。本当に。

それが強襲科であり、武偵という仕事の暗部でもある。

銃撃や剣戟の中でキンジは、装備品の確認や、自由履修の申請など、ほかの事で時間を使ってしまった。

キンジは強襲科の中ではかなりの人気がある。だが強襲科のあいさつは過激なもので——

「おう！キンジ！お前はぜったいここに帰ってくると信じてたぞ！さあ、ここで1秒でも早く死んでくれ！」

「まだ死んでなかったのか夏海。お前こそ俺よりコンマ1秒でも早く死んでくれ」

死ね死ね言うのがこの挨拶なのだが、キンジは全員に死ね死ね返してたら、2時間ほど喰ってしまった。

俺は強襲科を後にして、学園島を歩いていた。

強襲科のやつは相手にならんし、何よりランクを悟られたくない。格闘の訓練したら、腹が減ったので俺は駅に向かう。

あれは……レキか？暇だし、試しに飯にでも誘ってみるか。

「おいレキ、飯食いに行かねえか？」

レキは少し考えるように、頭を少し傾けた。

——多分、断られるだろうな。

「いいですよ」

なに！？レキがOKしてくれただど？

ロボットレキと呼ばれている通り、レキには感情がほとんど表に出ない。

「じゃあ、行くか」

コクン。

レキがうなずいてついてくる。何かこれ、視線を感じるな…。

俺達はモノレールに乗ると、3つ目の駅で降りた。このあたりに俺のよく行くラーメン屋があるんだよな…

「ここだ、入るぞ」

「いらっしやいませー」

この声、どこかで――

「マイ！？何故お前がここにいる！？」

――マイかよ！レキもいるし、これは言い逃れ出来ん！

「――先輩。このことは後でじっくりと聴きますからね…。レキさん！お久しぶりです！」

レキは、コクン、とうなずいている。

そういえば、マイは尋問科の授業も受けていた気がする。確か、ランクはBのはず…。それより俺は不思議なことを聞いた。

「ん？マイとレキは知り合いなのか？」

強襲科のマイと狙撃科のレキは接点がないはずだが…

「そうですね、故郷が一緒なので」

「へえ、そーなのかー」

特に興味がなかったので適当に流す。俺達は席に着くと、頭に入っているメニューを頼んだ。

「大盛りラーメンと餃子を一つ。それと、レキには一番高い奴を頼む」

俺の財布には2万ほどあったから大丈夫だろう。

俺は暇になったのでレキに話しかける。

「お前は、よくこういうところに来るのか？」

「いいえ」

「ほかのやつとは来たりするのか？」

「いいえ」

…何か、会話が續かないな。

「じゃあ、クラスのやつには誘われるのか？」

「はい」

「じゃあ、なんで今回は来たんだ？」

「桜火さんだからです」

…クラスのやつには誘われるのに、俺と一緒に来るのか？

「はい、ご注文の品です」

俺の前には、大盛りラーメンと餃子がおかれ、レキの前には、バケツに入ったラーメンがおかれた。

いやいや、これは何かの嫌がらせだろう。そう思って俺がきくと…
「これは今月からの新メニュー、バケツラーメンです。価格は2万円、15分以内に食べたならタダです。よい、始め！」

俺も食べながらレキを見る。

おい、レキのやつノーモーションで喰ってやがる！頼むから倒れないでくれよ、俺の喰い逃げと、お前の命なら、完全にお前の命のほうが大事なんだから。

俺が麺を喰い終わるうちに、レキも麺を喰い終わっていた。

おいおい、麺3倍はあっただろう。

そのままレキが汁まで飲み干すと、きっぱりと言いつつ放った。

「——私の感覚では、今、マイさんが測定を開始して5分16秒です」

すごすぎる、大食い選手もこんな速さで食べきれないものを、ものの5分で喰いやがった。

「ああ、これは悪夢だ…きつと悪い夢なんだ…」

分かるぞ、マイ。

お前はまだ1年、まだ常識外れなものを見ることがないんだ。

俺は自分の部屋に帰ってきていた。キンジも帰ってきていたらし

くソファに座っている。

「キンジ、今日はとうだった？」

「散々だ、アリアにゲーセンで振り回されてた。そっちは？」

「俺はレキのすごさを垣間見た気がするぜ」

今日は疲れた…もう寝よう。

翌朝、俺は時計をラーメン屋に忘れていたことに気づく。

「キンジ、今何時だ？」

「7時37分だ。」

「もう少しいるか」

おかしい、俺達はちゃんと早く出たはずだ。なのに、大粒の雨が降り始めたバス停には7時58分のバスが止まっていて、生徒が少し詰め状態で乗り込んでいるところだった。

「やったー！乗れた！おはようキンジ！桜火！」

そして無情にも、バスの扉は閉ざされていった。

「——歩くか」

「そうだな」

俺達は武偵高に向けて歩き出した。

強襲科の体育館の前で、キンジの携帯が鳴った。

『キンジ！今どこ？』

少し声が聞こえるが、多分アリアだろう。でも、今は8時20分、アリアは今1時間目の授業中のはずだ。

「今は強襲科の近くだ。」

『ちょうどいいわ、今からC装備に着替えて、女子寮の屋上に来なさい。いますぐ』

「何だよ、強襲科の授業は5時間目のはずだろう？」

キンジが文句を言うと、アリアはこちらに声が聞こえるくらい声を荒げた。

『授業じゃないわ、事件よ!』
俺は目が眩んだ。

俺達が屋上に出ると、俺達と同じ、C装備のアリアと、制服姿のレキがいた。

「レキ、お前もアリアに呼ばれたのか」

「はい」

レキは狙撃科のSランク、天才児だ。基本的にドラグノフ――狙撃銃を使う。

「時間切れね」

無線をしていたアリアがくるっと俺たちに向き直る。

「もう一人くらいSランクが欲しかったけど、ほかの事件でいないみたい」

アリアの中では、キンジはSランクらしい。

「4人パーティーで動くわよ」

「その前に作戦説明しろ。で、何の事件何だ？」

「バスジャックよ」

「――バス？」

「武偵高の通学バス。7時58分にあんた達のマンションに停留したやつ」

「なんだって!？」

あれには俺の知ってる武藤、不知火、マイ達がすし詰め状態で乗ってるはずだ。

「犯人は、いるのか」

「多分いないでしょうね、バスに爆弾が仕掛けられているわ」

――爆弾――

俺とキンジは、前回のチャリジャックが脳裏を横切る。

「犯人は『武偵殺し』あいつの電波をキャッチしたわ」

武偵殺しは毎回同じ電波を使っているのだろう。

「おい、『武偵殺し』は逮捕されたんじゃないのかよ」

「それは真犯人じゃないわ」

「おい、まて、お前は何の話を――」
そこでヘリが来た。

「ああもう！やってやる！」

前方で、キンジとアリアが話している。なにを話しているのかは、ヘリの音で聞き取れない。

『警視庁と東京武偵局は動いてないのか？』

『相手は走るバスよ？それなりに準備が必要になる』

「じゃあ、俺達が一番乗りか」

インカムを通して会話する俺達は、バスが見えるまで待った。

『見えました』

レキが外を見て言う。

――どれだ？

『ホテル日航の前を右折したバスです』

「よく見えるな。視力幾つだ？」

『左右ともに6・0です』

4・0の俺よりいいじゃねえか。

『空からバスの屋上に飛び移るわよ。キンジは中、桜火はそのまま上で待機、敵が来次第つぶして頂戴。レキはヘリで援護』

『中に犯人がいたらどうするんだよ？』

『『武偵殺し』なら中にはいない』

『『武偵殺し』じゃないかもしれないだろ！』

『その時はなんとかしなさい。あんたなら出来るでしょ？』

こいつは危険だ。あまりにもパーティーの実力を過信している。

俺は構わないが、キンジなら命を落とすぞ。

「今のキンジには無理だ」

『死にそうになったら、あたしが助けてあげるわ』

訂正、自分の実力もだ。

俺達は強襲用のパラシュートで、ほぼ自由落下の速度でバスの屋根に落ちる、そこでなまっていたのか、キンジが落ちそうになる。

「キンジ！あぶねえだろ！」

俺はキンジに手を伸ばして落ちるのを阻止した。

「すまん！」

「キンジは中を頼む！」

キンジが中に降りてゆき、アリアがいないことに気付いた。たぶん、バスの下の爆弾を解除しているのだろう。

そこで俺は、後ろから、黄色の無人の外車が突っ込んでくるのが分かった。

「アリア！」

俺はアリアのワイヤーを引き上げると、ヘルメットが割れたアリアが上がってきた。

大きな外傷はないが、額にバツの傷があり、俺はバスの中にアリアを入りに下に降りた。

俺が下にいると、数名けが人がいた。

アイツは…マイ！

俺はマイはけがをしているが命に別状はないようだが、

「せん…ぱい…？」

マイは頼るような目で俺を見てくる。そこで俺はSSになった。

「ああ、行ってくる」

俺はバスの上に出ると、2丁の銃、CZ75と、オートマグ？を構え、黒い本体に、美しい桜が描かれたナイフ、『夜桜』と、銀色の本体に黒い桜が描かれたナイフ、『墨染桜』の2本を手首に嵌め、2本の日本刀、『烈火』と『霧雨』をトンファーのように構えた。

これが俺の本気、『双銃四剣』（シクサ）だ。

さらに、背中では10本のナイフや剣が翼のように広がった。――

――『無限剣』だ。

この状態は、SSの時しかねないが、その代わり人間を超える動きが出来る。

「『砂薙』」

俺は構えた『烈火』を、音速を超える速度で横に薙ぐと、後ろの無人外車は大破した。

音速を超え、ソニックブームで外車を斬ったのだ。

「レキ、お前の狙撃で爆弾を撃ち落とせるか？」

『はい、出来ませんが、爆弾を搜索するのに2分ほどいただけますか？』

「ああ、大丈夫だ。あと、マイが負傷した。衛生科を呼んでくれるか？」

『分かりました』

俺がレキと無線で話し終わると、UZI付き無人の外車がバスを取り囲んでいた。

「さて、レキが爆弾を搜索する間に、俺はこの周りの外車をどうにかするか」

数は10台といったところか。

「『砂嵐』」

俺は10本の刀をそれぞれ外車に向けてはなった。その間、0.1秒。

それぞれのセンサーが感知する前に全ての車を大破させて、刀を背中に戻した。このモードのときには、超能力ステルスも使える。

『場所、特定しました』

「よし、撃つてくれ」

『はい。——私は、一発の銃弾』

インカムからレキの声が流れた。

これは、レキが狙撃をする際の、癖だ。

『——銃弾は人の心を持たない。故になにも考えない』

『——ただ、目的に向かって飛ぶだけ』

レキは、その銃口を3回光らせた。

後ろを見ると部品ごと飛ばされた爆弾が転がっている。

『——私は、一発の銃弾——』

そのまま爆弾は飛ばされ、海に落ちた。

——ドゥウウウウウン！！！！

海の中で爆弾が爆発し、大きな水柱を立てる。

俺は、装備していた『夜桜』『墨染桜』『烈火』『霧雨』を『無限剣』に直し、収納したところで、SSの効果が切れ、意識を失った。

気がつくと、俺は武偵病院にいた。

任務の途中で意識を失ったのは覚えていたが。今日は事件の翌日だそうだ。俺の部屋には、キンジ、涙目のマイ、見舞いに来てくれたレキの4人がいる。

「結局事件はどうなったわけ？」

俺はキンジに聞くと、キンジは悔しそうな顔をしていった。

「犯人は捕まらなかった。犯人が使っていたホテルも見つけたが、証拠はなし。んじゃ、俺はアリアの見舞いに行ってくるから」

と言つてキンジは出て行った。

俺は退院手続きを終え、アリアの病室に来た。

中からは、キンジとアリア言い争う声が聞こえる。

——— なんだよそれ！意味わかんねーよ！

——— あんたが、武偵をやめる理由なんて、大したことじゃないにきまつてるんだから！

俺はそのことを聞いた瞬間、アリアの病室に入って行った。

「おい！アリア！今何て言った！キンジ、あれ言つていいか？」

「……いや、俺が言う」

すまんキンジ。

「俺と桜火はなあ！海難事故で兄さんと姉さんをなくしてるんだ！それも、乗員乗客を全て避難させたうえだ」

「そ、それが何だつていうのよ」

「それで遺族の俺達はなあ、憧れだった兄妹をなくして、さらにその兄妹を『船に乗り合わせていながら事故を未然に防げなかった無能な武偵』と非難された！だから俺達は武偵をやめる！お前にこの苦しみが分かるはずもない！」

キンジがそこまで言つと、アリアも何も言えなくなつた。

「帰るぞ、桜火」

そこでアリアが何かつぶやく。

「わかったわよ…私が探してた人たちは、あんた達じゃなかったんだわ…」

翌日、俺はイライラしていて街に出ていた。理由はもちろん、アリア。

イライラしているが、何もすることのない俺は、ただぶらぶら歩いていた。そのまま30分ほど歩いた俺は、アリアを尾けているキンジを見つけた。

「何もすることないし、尾けてみるか…」

そのまま新宿まで来ると、新宿警察署で足をとめた。

「下手な尾行。尻尾がにょろにょろ出てるわよ？」

——キンジは見つかったか。さて、俺も種明かしするか。

「俺には気づかなかっただろう？」

「桜火、いたのか？」

アリアは首を振った。

「ええ、まったく気付かなかったわ」

「つか、キンジに気づいてたのならなんで教えなかった？」

「迷ってたのよ、教えるかどうか、まあ追い払っても付いてくるでしょうから」

面会室で会った人は、アリアの母親だった。

「まあ、アリア。このどちらかが彼氏さん？」

「違うわ、ママ。こいつらは、遠山キンジと神代桜火、武偵高の生徒で、『武偵殺し』の3,4人目の被害者よ」

「はじめまして、キンジさん、桜火さん、アリアの母で神埼かなえと申します」

「ママ、おとといにはバスジャックも起きてる。ぜったいに『武偵

殺し』を捕まえてやるわ。そうすればママの懲役864年が一気に742年まで減刑されるわ。他のもぜつたいななんとかするから」

——アリアの言葉に、俺達は目を丸くした。

「そして、ママをスケープゴートにしたイ・ウーの連中も全員ここにぶち込んでやるわ」

俺は、アリアの言葉を聞くと、ここにいてはいけない感じがして、部屋を後にした。

「どういづつもりだ、教授……」

そんなことをつぶやきながら帰っていると、理子からメールが来た。

——至急、クラブ・エステーラに来たれよ。

何か、嫌な予感がしたが、行くことにした。

「しゅんちゃん！」

「うるさい、静かにしろ、他人の迷惑だ」

店を見渡すと、武偵高の生徒もいる。出来る限り、事は避けたいな。

そんなことを考えてると、理子が腕を絡ませてくる。

やばい、こんなとこ武偵高の生徒に見られたら誤解され

「やだ桜火、今度は理子ちゃんと付き合ってる」「桜火ってチビ専門？」「マイちゃんの事もあるし、そうだと思う」

——てるし！もう逃げ場はないな……

俺は、理子に押し込まれる形で、個室に入った。

「ねえ、しんちゃん。アリアとケンカしたでしょ」

「そんなこと、お前に関係ないだろ」

「キー君としんちゃんはアリアと一緒にいないと楽しくない！」

理子は、テーブルに会ったショートケーキをフォークでグサリ。

「はい、しんちゃん、あーんして」

「するか、バカ」

「『武偵殺し』」

「何か分かったのか」

「あーんしてくれたら教えてあげる」

かなり嫌なことだが、死ぬわけでもない、情報のためだ、仕方ない。

「あのね、『武偵殺し』の仕業と思われる、『可能性事件』を見つけたの」

制服のポケットから取り出したコピー用紙を、俺に見せつけてくる。

「――！」

血が凍る。

『2008年12月24日浦賀沖海難事故 死亡 遠山金一武偵(19) 神代桜武偵(19)』

「この名前、片方お姉さんでしょう?」

理子の声が聞こえなくなる。

なぜ、姉さんを狙った。

なぜ、姉さんや俺を狙った。

なぜ――。

「桜火っ」

理子は、狭い個室の中、俺をソファに押し倒す。まったく話を聞いて無かった。

「桜火、ゲームみたいなこと、しょ?マイは強襲科で戦闘訓練中だし、アリアは明日の7時にロンドンに帰るし」

理子の言葉で、何かがつながった。

「理子、すまん!」

俺は理子の前で、猫だましを使い、上下を逆にする。そして、そのまま個室から出る。

俺の予感が当たれば、明日アリアが死ぬ!

俺は、空港に来ていた。

「明日、7時からのロンドン行きチケットはあるか？」

「はい、後一枚だけ」

「それじゃ、それを頼む」

そして、教務科に連絡する。

「あ、綴先生ですか？明日のアリアのロンドン行きの護衛するので、明日と明後日休みます。学年と氏名？2年A組、神代桜火です、はい分かりました」

これで、アリアの護衛につく理由は出来た。

翌日、飛行機内にて、アリアと合流した俺は、アリアに罵声を浴びせられていた。

「なんであんたがここにいるのよ！」

「だから、言っているだろ！教務科に命令されたんだよ！」

——武偵だ！この飛行機の離陸を中止しろ！

キンジか？何で来た？

「ちょっと出てくる」

「二度と帰ってくるな」

俺が通路に出ると、やはりキンジがいた。

「おうキンジ、どうした？」

「なんで桜火がいるんだ？」

それはこっちのセリフだ。

キンジの話を聞くと。この飛行機には『武偵殺し』が乗っているらしい。

「お前、どうしてそれが——」

「——お客様にお詫び申し上げます。当機は台風による乱気流を迂回するため、到着が30分ほど遅れることが予測されます——」

「——」
ガガガン！！

雷が鳴ると、アリアは首を縮めた。

「こわいのか？怖いなら、ベッドに隠れておけよ」

「こ、怖いわけじゃないじゃない」

と、言った矢先にまた雷が鳴った。

「キンジ、お前はアリアを頼む。俺は少し機長と話してくる」

俺が、個室から出ると、アテンダントがいたので、俺はそいつに聞いた。

「すみません、機長室は何階にありますか？」

アテンダントはそれを聞くと、少し待って下さい。と言い残して去って行った。

——バン！バン！

これは銃声か！？

俺が、機長室のほうに行くと、さっきのアテンダントが機長と副機長と思われる人物を運びだしていた。

「キンジ！行くぞ！」

俺は、C275とオートマグ？を抜きながら、後ろから来たキンジにそう叫んだ。

「——動くな！」

俺達がそういつとアテンダントは、特徴のない顔を上げながら、何かをこっちに投げやがった。

「Attention please で、やがります」

これは、ガス缶か！？

「キンジ！みんな！早く部屋に戻れ！」

俺は、そっいいながら部屋に駆け込んだ。すると、飛行機がいきなり揺れ、停電した。

「ち、やっぱり『武偵殺し』が乗ってたか」

キンジがそつつぶやくと、機内に非常電源の明かりがついた。

「やっぱり？じゃあお前は『武偵殺し』が乗っているのが分かっていたのか？」

「お前は気付かなかったのか？」

「ああ、俺は任務で乗っていたからな」

そこでキンジは俺達に説明した。

最初のバイクジャック、次のカージャックで3回目は、俺達ではなく、シージャック。俺達の兄姉が乗っていた事件で、直接対決だっただろうとキンジは話す。そして、俺達のチャリジャック、バスジャックと来て、このハイジャック。ここで『武偵殺し』はアリアと直接対決するつもりみたいだ。

そこまでキンジが話すと、ベルト着用サインが変に点滅を始めた。これは、和訳モールスか。

オイデ オイデ イウー ハ テンゴク ダヨ

オイデ オイデ ワタシ ハイッカイ ノ バー ニ イルヨ
ちっ、よりにもよってイ・ウーかよ。

「誘ってやがる」

「上等よ、風穴開けてやるわ」

アリアは、言いながら2丁のガバメントを取り出した。

「一緒に行つてやる、俺はともかく、今のキンジは使い物になるかわからんがな」

「来なくていい」

ガガン！また雷が鳴った。

「…どうする？」

「…く、来れば？」

俺達は、床についている誘導ランプに沿って一階のバーに向かう。

一階は、豪奢にバーになっている。

そのバーのシャンデリアの下。

カウンターに脚を組んでいるさっきのアテンダントがいた。

「やっぱりか…」

さっきのアテンダントは、武偵高の制服を着ていた。それも、フリフリだらけの改造制服を、だ。

「今回も、きれいに引つかかってくれやがりましたねえ」

いいながら、ベリベリと特殊メイクをはいでいく。その下から現れた顔は――

「やっぱりお前か、理子」

――理子だった。

「Bon soir」

キンジの説明の中に、理子から教えてもらった、とあつたが裏では理子の手の内で踊っていたということか。

「頭と体で人と戦う才能ってさ、けっこー遺伝するんだよね。武偵高にもそういう遺伝的な、天才はかなりいる、でもお前たちの一族は特別だよ、オルメス」

「――！」

理子の単語に、アリアは電流に撃たれたようにとまった。

――オルメス？ ああホームズの事か。

「あんた一体何者？」

「私は、理子・峰・リュパン4世」

リュパンってあのルパンの事か？

「でも家のみんなは、わたしの事を『理子』とは呼ばなかった。しかもそれがおかしいんだよ？」

「おかしい？」

「4世。4世。4世。4世さまあー。どいつもこいつも、使用人どもまで。おつかしいよねー」

「4世のどこが悪いのよ」

アリアは4世をはつきり言うと、理子は目を見開いて言った。

「おかしいに決まってるんだろ！ あたしは数字か！？ DNAか！？ 違う！ 私は理子だ！ 数字じゃない！」

突然キレた理子は、俺達にはない、誰かに叫びだした。

「會おじい様を超えなければ私は一生私じゃない。だからイ・ウーに入ってこの力を手に入れた。この力で私はもぎ取るんだ！ 私を！」

「おい、『武偵殺し』はお前だったのかよ！」

話についていけないキンジは馬鹿な質問をする。

「あんなのブログを兼ねたお遊びよ。本命はオルメス4世。アリア、お前だ」

理子の目は、いつものものではなかった。もはや獲物を狙う獣の目。

「100年前私たちの會おじい様同士の戦いは引き分けだった。つまりオルメス4世を倒せば、わたしは會おじい様を超えたことを証明できる。キンジ、桜火、お前らもちやんと役割を果たせよ？」

理子の目が、俺に向く。

「オルメス一族にはパートナーが必要なんだ。初代オルメスにも優秀なパートナーがいた。条件を同じにするためにお前らをくっつけてやったんだ」

「アリアと俺達を、お前が…？」

「そっ」

理子は、いつもの理子に戻る。

——こいつ、演じてやがったのか。バカ理子を。

「キンジ達の自転車に爆弾しかけて、わっかりやすい電波出してあげたの」

「アリアが電波を追っていることに気づいてたのか」

「そりゃ気づくよ、あれだけ通信科に出入りしてたらねえ。でも、それでパートナーにならなかったから、バスジャックで協力させてあげたの。」

「バスジャックもお前だったのか…」

「キンジいー、人に腕時計預けちゃだめだぞー？狂った時間を見ると、バスに乗り遅れちゃうぞー」

やっぱり乗り遅れたのも理子の仕業か。

「何もかも、お前の計画通りだったのかよ…」
隣でキンジかつぶやく。

「んーそうでもなかったよ。チャリジャックで会わせて、バスジャックで組ませてやったのに、くつつききらなかったのは予想外だったの。キンジに、理子がやったお兄さんの話を出すまで動かなかった

たのは、意外だった」

理子の野郎、キンジに話したのか。キンジが起こるのも無理は無い、キンジは一番慕っていた兄を『武偵殺し』に殺されたのだから「お前が…兄さんを…」

キンジが冷静じゃないのが分かる。

「ほらほら、桜火、相棒が怒ってるよ？一緒に戦ってあげなよ？」やろうと思えばできるが、俺はしない。一つ、気がかりなことがあるからだ。

「キンジ、桜火、いいこと教えてあげる。あなた達の兄妹は…いまイ・ウーにいるの」

「いい加減にしろ！これ以上死んだ兄さんを侮辱するな！」

「キンジ！お前の兄さんは死んでいないかもしれないんだ！理子もやった、とは言っただが殺した、とは言っただが無い！」

理子は驚いたように目を開いた。

「へえ、よく気づいたね。どうやって気付いた」

「理子のイ・ウーにいる。というのと、海難事故の時、二人の死体は上がってこなかった。そこから推測した」

「桜火、それは海に沈んだんじゃないのか？」

「いや、それは無い。その事件は俺が任務で海の底まで調べた。しかし周囲150km内に人間の死体は無かった。これで合ってるだろう？理子」

そう言っただけ理子に向き直ると、理子は肯定を口にした。

「よくわかったな。そこでキンジ、お前にいい話をしてあげる。あなたのお兄さんは、今理子の恋人なの」

キンジが理子にベレッタを向けようとする。いきなり飛行機が揺れた。

気づくと、キンジの手からベレッタが消え、後ろにベレッタの残骸が落ちる。

理子は、キンジにワルサーP99を構え、笑顔でキンジに言った。「ノンノン、キンジ、今のお前では戦闘の役に立たない。そもそも

オルメスの相棒は戦闘の相棒じゃないパンピーの視点からヒントを与え、オルメスの能力を引き出す。そういう活躍をしなきゃ」

うつとりとご高説する理子を見て——俺は『夜桜』で理子に斬りかかった。

「おっと、敵の武器が銃だけと思ったら、だめだよ」

俺の頬をナイフがかすって通り過ぎた。その出所を見ると、理子が、髪でナイフを操っていた。

「さすがだな、桜火、だがこのナイフには、即効性の睡眠薬が塗られている。いくらSランクといえど、睡眠薬にはかなわないでしよう?」

ちっ！睡眠薬か！このままじゃ…ねむって…しま…。

7 (前書き)

戦闘シーン短くて済みません。本当にごめんなさい。

気がつくと、アリアは、ぐったりと倒れ、キンジが叫んでいる。

「アリアっ！アリア！」

深紅が床を染めていく。俺はSSになりながら、キンジに叫んだ。
「っ！キンジ！アリアを連れて逃げる！」

キンジはアリアを抱えながら、走って出て行った。

「早かったね、桜火、かかりが薄かったのかな？」

「ああ、そのようだな。おかげで『双銃双剣』になったお前と戦える」

理子は、俺を刺そうとしたナイフのほか、左手にもう1丁のワルサーP99と、髪には、もう1本のナイフが握られていた。

「ねえ桜火、あなたってさあ、小学1年から中学2年までどこにいたの？アリアの情報を探してる時にあなたの情報探してたけど、小学入学前と、中学2年で強襲科Bランクっていう情報しか出なかったけど」

「お前はイ・ウーにいるんだろう？ジャンヌあたりに聞けば正確な情報が得られるぞ」

「なぜお前がジャンヌの名前を知っている」

理子は驚いた顔で俺に問いかける。

「そんなことより、戦闘を開始しないか？お前は俺の仲間を傷つけた、それにより本気が出せる」

背中の中3本の翼を展開し、その中から『墨染桜』、『蒼火』、『時雨』を抜くと、それぞれを装着した。

「へえ、やっぱり桜火が『無限剣』だったんだ」

「正直いうと、この装備だと殺しそうだから『無限剣』はやめさせてもらっよ」

俺は『無限剣』を閉じ、『双銃四剣』の型になる。

「さて、戦闘開始、と行きたいところだが、その前に電話をさせて

くれ」

「いいだろう、命乞いの時間くらいはやる。さっさとすませろ」
携帯を取り出すとキンジにかける。

「ああ、ありがとう。ああキンジか？そっちが終わったら操縦室に行つてくれ。ああ、こっちで何とかする、じゃ」

電話を切ると、理子に向き直る。

「さあ！始めようか！」

俺と理子の声が重なり戦闘が開始される。

俺は理子に突っ込んでいき、理子に向かってCZ75とオートマ
グ？を連射して撃つ。それは髪の手刀に阻まれたが、一気に接近
することができた。そしてそのまま『時雨』を横に薙ぐ、そこで理
子にかわされ、理子がワルサーを2発ずつ撃つ。計4発を『夜桜』
『墨染桜』『蒼火』『時雨』で斬る。そして2人は接近し、理子が
射撃の構えをとると、『蒼火』でワルサーを斬り落とす。

驚愕の顔になっている理子のツインテールを『夜桜』『墨染桜』
の峰で叩いた。すると髪からナイフが落ち、顔と顔が当たるくらい
の距離で俺は言った。

「理子、お前は初代リユパンを超えるためにアリアを狙ったんだろ
？それなら、何もホームズを狙うことはない。確か、聞いた話だと
初代リユパンはブラドを倒せなかった。なら、俺と一緒にブラドを
倒そう。そうすれば、初代リユパンを超えたことになるし、ブラド
から恐怖することもない」

俺は理子を諭すように言うと、理子は涙目になって俺に怒ってき
た。

「じゃあ、なんで助けなかった。なんで理子を助けてくれなかった
！」

「助ける機会がなかった。と言えば許すか？」

「許すわけない、だけど、理子をずっと守ってくれるなら許す」

よし、これで『武偵殺し』は解決だな。

「じゃあ、一つ条件がある。アリアの母親の裁判で証言をしてくれ、

そうすれば、俺はお前をずっと守る」

「いーよそれくらい」

理子が承諾したので、操縦室へ向かう。

「そういえば理子、俺の姉が活着ているのはほんとか？」

俺は理子に凄く気になっていて、事実であつてほしいことを言つた。

「活着ているのとい・うーに活着るのはほんと、キー君のお兄さんもいる」

「そうか、今から操縦室だが、アリアをあおるようなことは言わないでくれよ！？」

飛行機が大きく揺れた。それと何か爆発音もしたから、ミサイルでも飛んできたのか、俺達は操縦室に入った。

「キンジ！状況は？」

「エンジンがやられたみたいだ。桜火、メーター読めるか？」

「ああ、一応」

俺は、キンジがHSSになつてゐることに気付いた。

俺がメーターを読もうとすると、アリアが俺を怒鳴りつけてきた。

「桜火！なんで理子がゐるのよ！説明しなさい！」

「理子がお前を狙う理由を知つていたから説得した兼、助けた。以上。大丈夫だ、お前の母親の裁判では理子が証言してくれる」

俺はアリアに説明してメーターを読もうとすると、理子がなにが起こつたかを説明した。

「さっきの振動はミサイルで、内側エンジン2基をつぶしている。

この機体の内側のエンジンは燃料庫の門もしているから、燃料が漏れているはず」

まじかよ、燃料漏れはきついぞ。この位置からだ、羽田が近い。

「理子！あんたの事は信じられないわ。桜火、燃料は？」

「いや、理子の事は本当だ、540、535、どんどん漏れてる。

もつてあと15分だ」

この便には燃料漏れを直す方法はない。その前に、羽田空港を使う許可を得ないと。

『こちら羽田コントロール、ANA600便、緊急周波数127・631で応答せよ』

「こちらANA600便、先ほどハイジャックされたが、今はコントロールを取り戻している。パイロット2人が負傷した、今は武偵2人が操縦している。俺は遠山キンジ、ほかは神埼・H・アリア、神代桜火、峰理子だ。」

『神代だと…？』

「そんなことより、近隣の飛行機の回線を全て開いてもらえないか。そして全員に着陸の仕方を言わせてくれ」

『それは出来るが…とてもそんなことができるとは思えん』

「いまの俺なら出来る。それじゃ、頼みます」

キンジは11人の言葉から、着陸の方法は把握出来たらしい。今は計器も読めるみたいだ。

高度は今1000フィート、300メートルくらいだ。

横須賀上空に差し掛かったあたりで――

『こちら防衛省航空管理局だ、羽田空港の使用許可はない。空港は現在、自衛隊により封鎖中だ』

「何言つてんだ！こっちは後15分しかないんだ！防衛大臣に伝える！俺が…神代桜火が今まで受けた依頼をマスコミに流されたくないかったら、空港使用許可を出させてな！」

俺は、防衛省相手に怒鳴っていた。

『神代…。分かった、防衛大臣に掛け合ってみよう』

アリアがこつちを見て、不審な目をしている。

「あんた…今までどんな依頼受けてきたのよ…」

「それは言えない。言ったら日本が減ぶからね」

俺はアリアに不審な目で見られながらも、防衛省の返答待った。

そして、羽田に着陸するのにあと少しでぎりぎりのところで防衛省から連絡が来た。

『羽田空港の使用を許可する』

「キンジ！聞いたか！羽田に降りろ！」

「分かった！」

そこでSSが切れ、気を失いそうになり、倒れかけると理子が支えてくれた。

「これで守ってくれるっていう約束が果たしてもらえるね…ゆっくり休んでよ」

「ありがとう。理子…」

そして、そのまま気を失った――。

8 (前書き)

アリア編はこれで終わりです。
すごく短いです。

結局着陸は成功し、俺は武偵病院に運ばれ、俺が気がつくと同時に退院させられた。

俺が病院からであると、俺はすぐさま、マスターズ教務科に向かった。部屋の移動のためだ。俺は、国からの依頼や、教務科からの依頼を多くこなしているため、部屋の移動が基本的に自由なのだ。

今度の部屋は——インフォルマ情報科

情報科は、男子寮・女子寮が分かれているのだが、俺が申請を出したときには男子寮が全部屋満員で、教務課が「こいつなら大丈夫だろ」という理由で女子寮になっている。

夜になり、俺は運ばれてきた家具を部屋に配置すると、銃声が聞こえてきた。多分、キンジの部屋だろう。教務科から帰ってくるとき、白雪が凄い顔をして走って行ったから、そこらへんだろう。

——キンジ、ご愁傷さまでした。

8（後書き）

次は魔剣編です。ジャンヌとの戦闘も短いのでご了承ください。

a c t 2 魔剣編（オリ話含む） 1（前書き）

魔剣編に入りますが、同時進行で桜火のオリ話を進めます。

——キンジから話を聞くと、昨日はやはり白雪が部屋に来ていたようだ。

「お前ひどすぎるぞ、移動するなら先に言ってくれ」

「ごめんごめん、急に思いついたことだったし、何か嫌な予感もしていたからね。それにしてもすごかったよ。情報科まで銃声インフォルマと声が聞こえてたし」

昨日白雪が来て、アリアと闘った（や）らしいが、家具とかが死んでいるのを嫌に思ったキンジが止めに入ったらしい。

「それより桜火、なんで昨日いなかったのよ。白雪の相手、1人でつらかったのよ？」

「それはお疲れ、アリア。でも俺の今の部屋は情報科だ。キンジの部屋じゃない」

キンジの正面にいるアリアは、不思議そうに俺を見てくる。

「どうかしたか？」

俺はアリアに当たり前の疑問を持ちかけると、意外な答えが返ってきた。

「桜火、あんた転科したの？」

「お前知らないのか？桜火は国や教務科の依頼をよくこなしているから、基本的にはどこに住んでも自由。それだけの実力者だ」

「いやいや、さすがにRランク武偵と戦ったら確実に負けるよ」

俺達がそんな談笑をしていると、不知火と武藤がやってきた。

「遠山君達、ここ、いいかな」

イケメン野郎の不知火亮。女子によくモテル、強襲科のAランク、拳銃はLAM付きのSOCOMレーザーライト。ナイフ、格闘術、射撃、全体的に信頼が置ける実力の持ち主だ。

「聞いたぜキンジ、事情聴取させろ、逃げたら轢いてやる」

こちらは俺が新学期初日に気絶させた、車輛科ロジの武藤剛気。一輪

車からスペースシャトルまで操縦できるという、乗り物専用の人外だ。

ちなみに銃は整備が楽だからという理由で、コルトパイソン。装填数は少ないし、音もでかい。武偵向きではない銃だ。

「で、何だよ事情聴取って」

「お前、星伽さんを泣かせただろ」

さすがは武偵高。情報、いや噂が広まるのが早い。…つか武藤なんでしょう。ってしてんだよ。

「まあ、この話は置いて不知火、お前アドシールドはどうする？」

アドシールドとは…長いからwikiでお願いします。

「たぶん競技には出ないよ。補欠だからね」

「桜火はどうする？」

「全競技で推薦があったが辞退した」

「お前、全競技って、人間か？アリアはどうする？」

「私も競技には出ない。拳銃射撃競技ガンシューティングの代表に推薦されたけど辞退した」

「んじゃあ、イベントの手伝いか。何やるか決めたか？」

「私は、閉会式のチアだけやる」

チア？アルカカ。

アルカカとは、簡単に言うと、戦闘をチアリーディング風にしたものだ。

「あんた達は…バンドでもやりなさい」

「すまん、俺は依頼あるからパスで」

アドシールドまでの期間には、俺は依頼が入っていて武偵高にいない。

「水臭いな、桜火。依頼くらい俺達に頼ってもいいのに」

「すまんな、武藤。そうしたいのはあるんだが、この依頼は教務科からで、護衛の依頼なんだ」

「分かった」

「じゃあ、俺は行ってくる」

そう言っただけ席を立つと、俺は、羽田空港に向かった。

今回の護衛の依頼は、ある金持ちの娘の護衛だそう。報酬は100万、単位2・0にアドシアードの準備免除だ。でも、わざわざ俺に依頼をするなんて、何か裏がありそうだな…

そんなことを考えながら、空港内を歩いていると、茶髪の身長の低い女性にぶつかった。

「ごめんなさい！」

女性はそのまま走り去ろうとしたが、俺は腕を掴んで止めた。

「俺の財布をとってどうする気だ？理子」

女性はそのまま、にやり、と笑って顔の特殊メイクをとった。

「さすがに気づかれちゃうか。しんちゃんさすが！」

「しんちゃんはいいい加減にやめてくれ。で、何でここに理子がいる？大方司法取引をして、帰ってきていて、教務科から来た依頼は改変されていて、俺を呼び出すためだと思うが」

「分かったよ、しんちゃんがだめなら、おうくんって呼ぶね！でも、護衛は本物だよ？。さっさと行きましょー！」

「おい！待って！」

そう言っただけ理子は俺の手を引きながら、飛行機へ向かった。

a c t 2 魔剣編（オリ話含む） 1（後書き）

あとがき何しよう…何か思いついたら書きます。

2（前書き）

すみません！学校の色々でネットができませんでした！ストックは溜めれたので、2日に1回は更新します！

「ああ、激しく鬱だ…」

依頼には、娘の護衛とだけあったが、理子に依頼の主を聞くとかなり鬱になっていた。

「よりもよってアレの護衛とはな…」

アイツ、護衛なんていらなと思うが…。

「それより桜火、ジャンヌにお前の事聞いたぞ」

理子が俺を名前で呼んだ——『裏理子』か。

「俺の履歴なんて聞いても無駄だったろ？」

「正直無駄だったな。だがジャンヌから聞き出せたのは11〜12歳までの話だ。6〜11歳までの話はどうなんだ？」

理子め、鋭いところを突いてくるな。

「それはまたいつか話す機会があったらするよ」

この後も無駄な雑談をしていると、依頼者がいる九州、福岡県にいった。

「久しぶりの福岡だな、俺は少し博多に行ってくるが、どうする理子？」

「行く行く！絶対行く！」

…何かテンションおかしくないか？こいつ。

俺達は、ここから少し離れた所にある、福岡武偵高へと向かった。

「ここが、福岡武偵高。俺が中一の春の間だけ通っていた福岡武偵中からはエスカレーター方式で上がってこれる。東京武偵高よりは生徒が少ないが、高ランク武偵が多く在籍している」

「しってる、理子も色々調べた」

さすが怪盗、情報が早いな。

「じゃ、俺は知り合いに会ってくるから、お前は好きにしる」

「じゃ〜ついてくね」

「好きにしる」

福岡武偵高に入り、強襲科に向かっていると、色々なやつに会った。

「おい桜火、お前帰ってきたのか？」

こいつは確か…情報科志望だった新井か。

「いや？依頼で来たただけだぞ」

「桜火！後ろの美少女は誰だ？」

こいつは…SSR志望だった安勇か。

「峰理子、探偵科のAランクで、りこりんと呼ぶと喜ぶぞ」

「りこりんで〜す！」

わー！！！！！

こいつ、連れてくるんじゃないかった。

「やあ、桜火君久しぶりだね」

こいつは、大野。不知火みたいなやつだ。

「久しぶりだな、確か強襲科のAランクか？」

「そうだよ、またいつかみたいに訓練しないかい？」

「すまん、依頼だから無理だ」

…おいおい、なんでこんなに集まっているんだ？俺の事知っている奴なんてほとんどいないはずだぞ？

そんなことを考えながら歩いていると、目的の人物が話しかけてきた。

「おお、桜火、久しぶりじゃねえか。転校つてわけでもなさそうだしな、何で来た？」

「こちらこそな、真樹。こっちに来たのは俺指定で来やがった依頼だ」

園江真樹そのえ まき、確か強襲科のSランク、一年の頃はよくつるんだ仲間で情報科としてのスキルも高くAランクほどあるってメールで聞いた。

「依頼か、手伝うか？」

「いや、大丈夫だ。危なくなったら電話するから来てくれよ」
「そうか、わかった」

そのころ、東京では、キンジとレキが食事に出かけていた。

「レキ、そんなの大丈夫か？」

レキの前にはバケツに入ったチャーハンが置いてある。このチャーハンは、前回桜火とレキが、バケツラーメンを食べた所の新メニュー、バケツチャーハンだ。

「問題ありません」

そういつてレキがスプーンを持つと、前回同様、マイがストップウォッチを持っている。

「15分以内に食べきれば、ただで、それを過ぎれば5000円払っていただきます。じゃあ始めます。3・2・1スタート！」

マイはストップウォッチを開始すると、キンジに向かって、話しかける。

「そういえば遠山先輩、桜火先輩はどこに行っただんですか？朝見たとき以外見てませんが」

「アイツは、教務科からの依頼に行ったよ。帰ってくるのはアドシアード当日だそうだが」

「そうですか…女性関連で何か嫌な予感がします。桜火先輩は大丈夫でしょうか…」

いいながらマイは顔を青くする。

「分らん。アイツは俺同様女性に疎いからな」

それを聞くと、マイは不思議そうにキンジを見た。

「そうですか？整った顔立ちとか、かっこいいところとか、女性に好かれそうな気がしますか？」

「アイツは昔、幼馴染を裏切ったと言ってたな。そこに関係があるんじゃないか？」

なんて雑談をしていると、レキが食べ終わったようだ。

「食べ終わりました。キンジさん、その幼馴染の事と、今回の依頼を少し教えていただけませんか？」

「前回同様早いですね。2分17秒なんて人間の数字じゃないですよ。あ、わたしもお願いします」

「分かった。あいつの幼馴染は、俺やレキと同じ年で、銀髪の超能力者だそう^{ルス}だ。それくらいしか桜火からは聞いていない。依頼のほうは、九州の福岡に護衛だそうだが、それでいいか？」

「情報、ありがとうございます」

「私も、情報ありがとうございます！」

そうしてマイは厨房に、レキは女子寮へ去って行った。

夕方頃、桜火達は福岡武偵高を後にすると、依頼主の家に向かった。

「はあ、ここはもう2度と来たくなかったんだがな……」

俺達が今いるのは神代家、福岡最大の金持ちの家であり、俺の実家だ。

この家には、中一の一学期から家を出て行って、一度も帰ってきてない。

玄関にあるインターホンを押すと、中からドドドドドドドドドドと、何かが走ってくる音が聞こえる。

「理子、俺が開けると同時に右に避ける」

「？何か分からないけど分かった」

3・2・1——— 今だ！

ガラツ、と玄関の扉をあけると、中から女性が飛び出してくる。そこで桜火と理子は右に避けると——

———ズシャアアアアア！———と女性は盛大に顔からこける。

「大丈夫か？姉さん」

この女性は神代桜輝^{しんだいようき}、桜火の姉であり、今はイ・ウーにいる神代

桜の妹で、普通の武偵より格闘術が得意な普通の高校3年生である。
「桜火！4年もどこ行つてたの！お姉ちゃんが大好きな桜火と遊べないじゃない！」

訂正、少しブラコン気味。

「東京武偵高だ」

「まあいいけど。で、その女の子はどこ誰ですか？」

変わり早いな！

「姉さんの護衛のパートナーの峰理子だ」

「で、家の桜火とはどんな関係で？」

なんで俺との関係を聞いてくるんだ？まあ、理子が余計なことを言わないように祈るだけだ。

「はいはい！りこりんは、おうくんの彼女です！」

バキイ！パラパラパラ……

おいおい、姉さんの手のひらの砂利が砕け散ってるよ！怖いよ！

「ほんとなの？桜火……」

「違う違う！今は理子の嘘！俺に彼女なんていない！」

なんで身内に対して浮気がばれた夫みたいなことしないといけないの！？しかもなんで理子は、残念そうな顔をするの！？え、何これ期待あり！？で、なんで二人とも臨戦態勢取るの！？

「もうこの話は終わり！姉さんは理子と闘おうとしないで、さっさと親父のところに連れて行ってくれ」

「もう、桜火がそういうならこの娘と闘うのはやめるけど」

「私も桜火が言うのならミンチにするのはよすよ」

正直、帰っていいですか？この二人の間にいると、死にそうなんですけど……

俺達は、親父のいる客間に行つて依頼の内容を聞いていた。

「じつは…桜輝が狙われとるんだ」

「それだけで俺を呼んだのか？そんな依頼、福岡武偵高に頼めばいい話じゃねえかよ」

実際、護衛の依頼は多数ある。総理や有権者などのえらい人を護衛する依頼、一般人を護衛する依頼、そして、俺が今受けている金持ちの護衛だ。金持ちの依頼は、報酬が多くもらえるため、人気が高く、比較的实力の乏しい武偵でも、チームで受けて成功させやすい依頼だからだ。

「いや…福岡武偵高にも依頼したのだが、桜輝の気に召さなかったらしく、桜輝が追い払っていったんだ。そこで、小さいことから気に入っていたお前を呼んだのだ」

「で、さっき姉さんに伝えたら、俺が襲われる形になったと」

人の好き嫌いが激しいとは桜姉さんから聞いていたが、ここまで激しいとは…

「はあ、俺は疲れたから飯食って寝させてもらうぜ。俺の部屋の防弾機能はまだあるのか？」

「ああ、残してあるが…何に使うんだ？」

何か嫌な予感がするので、俺は姉さんと理子にこんな提案をする。「姉さん、理子、今日は俺の部屋で寝てくれ。理子、部屋の位置は姉さんに聞いてくれ。俺はリビングのソファで寝る」

今日は疲れた…飛行機の中では理子がこっちにすり寄ってくるから休めなかったし、福岡武偵高ではみんなが集まってくるから仲のよかった友達ともほとんど話してないし、こっち着いてからは理子と姉さんが両隣にいてにらみ合ってるし、かなり疲れた…

俺はリビングにあるソファに身を沈める。そのまま意識は闇に落ちた……………

2 (後書き)

コメントとか評価とか、してくれるとうれしいです。

次の日、俺は少し早起きしシャワーを浴びて、自分の部屋に向か

「おい、もう少しで7時になるから起き――」

「ヤバイ、この光景はキンジには見せられない。」

俺のダンスやソファは何か物理的に破壊されたように、無残に粗大ごみと化している。その中で、傷1つ入っていない俺のベットで姉さんと理子が眠っている。いや、寝ていることは問題じゃないのだが、寝かたが問題だ。理子も姉さんも仰向けに寝ており、胸の部分のボタンが3つほど開いてしまっている。もう少してキンジの言う魔窟が見えそうだ。

俺はそこでベットに近寄らない程度に部屋を歩きながら、ベットの横にある壁へと向かった。この壁には防弾、防斬が施されていて、RPG程度では傷も付かない金庫が隠されている。

「よかった、ここは無事か……。おおあつたあつた」

俺は中であつたA RのU / SライフルM 14を取り出し、ベットの反対側の隅つこで整備を始めた。

30分後、整備が終わり、AKをかついで部屋を出ようとすると、

「うお！びっくりした」

おい！起きてたなら最初に来た時に起きろよ！

「びつくりしたのはこっちだよ、おつくくん！なんで何も構ってくれないの！？」

「そうだよ桜火！せっかく峰さんと色仕掛けしたのに！」

おい、姉さん。弟相手に色仕掛けってあんた頭大丈夫ですか？

「つか、姉さん、いつ理子と仲良くなっただよ」

「？桜火の中」の頃の女装写真見せたらいつの間にか――」

[XXXXXXXXXXXXXX]

[illegible]

止めてくれ！俺のトラウマを引きずり出すな！頼むからやめてくれ！俺が俺の部屋にこいつらを置いておいたことが間違いだった！「おい、姉さん！あの写真は全部焼き捨てたはずだろっ、なんで今ここにあるんだ！？」

あれは写真が返ってきたときに全部焼いたはずだ！あるはずがない！

「え？フィルムがあるから焼き増ししてもらっただけだよ？」

「しまったあああああああああ！！！！！」

フィルムとは、俺の人生での失態！

「おうくんって女装でもイけるんだね。理子いいこと聞いちゃった」

「今は全部3枚ずつ、1枚目はアルバム通称『桜火写真集』に、2枚目は使用用に、3枚目は人に見せるためにいつも持ち歩いているよ」

「くあwせdrftgyふじこlp;@:」

使用用ツて何だ！？何に使ってるんだ！？

「大丈夫桜火！？人の言語失ってるよ！」

もう駄目だ……おしまいだ……武偵高に戻ったら理子に全てをばらせるんだ……鬱だ……

「……死のう」

俺は首にナイフ、『墨染桜』『夜桜』の2本を当て、自殺の構えをとる。

「まだ死んじゃ駄目だよおうくん！理子との約束守ってくれてない！」

「そうだよ！まだ桜を見つけてないでしょう！？」

「もういいんだ、もう死のう……さよなら理子、姉さん」

「バカかテメエは」

チュン！

9mmパララムだと思われる弾丸が、桜火の頬を掠める。

「あぶねえだろうが！真樹！てかお前がなんでここにいる！学校はどうした！」

真樹は気にせず部屋に入ってくる。

「今日は武偵高もお前の姉ちゃんが通ってる高校も休みだ。俺がどこにいてもカンケーねーだろ」

それはそうだ、桜火に真樹のプライベートは関係ない。

「だけど人の部屋に入ってきて、いきなりm93rぶっ放すなよ、あぶねえだろうが」

ベレッタm93r、m92fの改良版として作られた銃で、フルオートが改造なしで使えるある意味気持ち悪い銃だ。ただし、このm93rは、政府により依頼されたときにしか生産されず一般の武偵では持つことが許されていない。真樹は…まああれだ、特別な存在だ。

「人が遊びに来た時に、その遊ぼうとした人間が、自殺しようとしてたら普通乗り込むだろ？」

それはごもつとも。

「で？何しに来たんだ？俺は依頼でいるんだ邪魔はしないでくれよ」

「ああ、分かってる。依頼は護衛で、護衛の相手はお前の姉ちゃんだろ？」

お前それをどこで——と言いかけて、俺は口をふさぐ。

こいつは科目は強襲科でも、情報収集能力はAランクだ。東京武偵高にでもハッキングしたんだろ。ぜったいに見つからないルートを使つて。

「んじゃ、どうする？いったん部屋を片付けて何かゲームでもするか？理子はあるよな。真樹、姉さんpsp持ってる？」

「理子は、いつも持ってるよ」

「俺も持ってる」

「私は無いよ、ゲームなんて、昔少しただけで今はほとんど——」

「じゃ、買いに行くか。博多駅あたりに行けば売ってるだろ」

予定の無かった俺は、少し強引と思いながらも、予定を決めた。

そのころキンジ達は学園島の端の通称『看板裏』にいた。

「あぶねえ……」

今のキンジの体制は、若干反った体制で刀が寸止めされている状況だ。

刀の持ち主はもちろんアリア。

「今のタイミングで500回イメージする。制限時間は10分、始め！」

「イメージ？」

「そう、イメージ。シャドーボクシングみたいに手を動かしてもいいわ」

くるっ、シャキ。

流れるような動作で背中に刀をしまっアリア。

「要するに、ただのイメージトレーニングか」

「こっちは今からタンコブ量産してもいいんだけど？」

さすがにタンコブ量産はやだな。ここは素直に従っておくか。

「分かった分かった。やりますよ」

キンジは深くため息をすると、しゅしゅ刀をつかむイメージを始めた。

「そうそうキンジ、ママに冤罪を着せたイ・ウーには剣の名士もいるんだから、対ナイフ術は武偵の基本。しっかりやりなさいよ」

「やるやる、やってる」

「無駄口叩かない！ペナルティマイナス30秒！」

そう言ってアリアは『チア』の練習を始めた。

4 (前書き)

すみません。忘れてました

そのころ桜火御一行は博多駅横のゲームズ前に来ていた。

「気づいてるか？桜火、峰」

ゲームズの入り口で止まった真樹が声をかけてくる。

「もちろんだよ」

「ああ分かってる。距離は1kmほどだな」

「視線だけで距離がわかるお前は凄いよ。俺と桜火が調べてくる、峰は護衛の続きを頼む」

俺と、真樹は逆方向にあるビルへと向かう。このビルは、上のほうで空きになっているようだ。

「このビルだな」

「ああ、そうだろう」

俺達は一気に階段を駆け上がり、屋上への扉を開く。すると――

「誰もいない？」

いや、気配は確かにここにあった。

不審に思った俺は、屋上に俺達しかいないことを確認すると、情報 の怪盗こと『理子・峰・リュパン』に電話をかけた。

「理子、今から言うビルの監視カメラにハッキングしてくれないか？」

『分かった、ビルの名前は？』

「島本ビルだ。ハッキングしたら屋上に10分以内に出入りした人間がいないか見てくれ」

『分かった。――出たぞ。金髪で大きな日傘を持った

女性が一人、お前達が入ってくる30秒前に消えた（・・・）。それだけだ』

消えた？おかしい、さらに金髪で日傘だと？……まさかあの人か

「いや、あの人はここにはいないはず…」

「了解だ。もう終わっていいぞ。真樹、戻るぞ」

「ああ、分かった」

そうして俺達は屋上を去った。

「フフ…あの子に会うのは久しぶりね…」

桜火達が屋上から去った後、扉の上にいた女性は、そうつぶやいた。

「おうくんたち遅い！」

俺達がゲーマーズに戻つてくると、何やら物騒な人たちに囲まれながらこつちに手を振ってくる理子がいた。

「おいおい嬢ちゃん、助けを呼ぼうにもそうはいかねえ——っ
て、また獲物が増えたぞ」

「ほんとだなあ、守りは男一人か。これなら早く片付きそうだなあ
！」

おい、糞不良ども、男一人だつて？俺は男だぞ。消されたいか？

「はいはい、不良ども。こっちは武偵だ、おとなしくしねえと暴行
罪の容疑で逮捕するぞ？」

「は？こいつ何だ？男か？」

「男だが何か？」

俺は、少し怒りをこめて言うと、隣にいる真樹が余計なことを言う。

「いい加減にしろよ、不良なら神代桜火の名前くらい聞いたことがある
だろ？」

俺は中1の頃、依頼で街の不良を一掃したことがあり、それ以来
不良からはかなり恐れられている。

「神代桜火だと…まさか、あの『鬼』なのか？」

おいおい不良、お前らの中で俺の称号はどんなことになってるんだ
よ。

「ああ、俺が神代桜火だ。見逃すからポケットのブツを置いて逃げ

る」

そういいながら俺が懷からCZ75を取り出すと、不良は中国製と思われる名前のわからない銃を置いて、一目散に逃げて行った。

「あ、そういえばまだ開いて無いんだった……」

開店時間を確認すると10時、今はまだ8時5分ほどだ。

「姉さんと理子は飯食って無かつたろ？マック行こうぜ」

そして俺達はマックへ向かった。

マックで理子達の飯を買ってきて、俺は全員分のハンバーガーを別の種類で買ってきたことを、激しく後悔していた。

「はい、おうくんあゝん」

理子やめてくれ、周りのおっさんや、真樹の視線が痛いじゃない。辺りを見回すと周りの通勤中のおとなと思われる人物達と、真樹から「あさっばらからいちゃいちゃしやがって……」などの嫉妬と憎悪に満ちた視線が俺に来る。

「ちよ、待て理子。戻る時間を考えろ」

今の時間は9時30分。片道25分もかった上に、店は大行列。かなり時間がかかった。

結局、俺達はそのあとゲームーズに行き、姉さんのpspとみんなでするためのソフトを買い、自宅に戻った。

5 (前書き)

長くなってけど...どうも。

「いえーい！また理子の勝ちー！」

現在14時、家に帰ってきたのが11時くらいだったから、3時間ほどしている。

ついでに今ので理子の連勝回数は80回を超えた。…つか、やりすぎだろ理子。

「おい、峰！お前強すぎんだよ！ちったあ手加減しろ！」

隣では、真樹がキレて、姉さんは猛練習中である。

「えー理子、手加減って知らない」

「いい加減にしろ！じゃなきゃこれでかたを付け——」

そう言つて、真樹がm93rを抜こうとすると…

——にゆるんツ！

何もない空間がいきなり割れ、中から人が出てくる。真樹と理子はそれぞれの武器を構え、姉さんは徒手格闘の構えをとる。

俺は3人に「ストップ」の合図を送り、でてきた人に話しかける。

「お久しぶりですね、八雲さん」

「あら、お久しぶり桜火。後、苗字で呼ぶのをやめてもらえないかしらと、前にも言つたでしょう？」

でてきたのは、東方projectでおなじみの、八雲紫である。

「すみません紫さん、今日はどういった「後、その敬語も」すみません」

「まあいいわ、藍、橙、でてきなさい」

紫が出てきたスキマから、9本の狐の尻尾が生えた女性、藍と、2本の猫の尻尾が生えた少女、橙が出てくる。

「おお、藍と橙もいたのか、久しぶり」

「お久しぶりだな、桜火。5年前よりも綺麗になったか？」

「桜火さん、お久しぶりですね。あのときは本当にありがとうございました」

藍、橙といった順番であいさつをしてくる。

「藍、あの話はやめてくれ。あれは一種のトラウマだ」

「いやいや、きれいになったわよ」婿に貰って行こうかしら」
そこで紫が口をはさんでくる。

「え？ちよ、おま」紫様！その話は私との決着がまだついてません
！」

え？何？そんな話しあったの？というより後ろが怖い…。

「ねえ、桜火、これがどういうことか、説明してくれるんでしょう
ね…」

俺の後ろには、理子と姉さんこと、本物の鬼がいた。

「もちろん説明するよ。こちらの人が、スキマ妖怪で妖怪の賢者と
呼ばれていて「桜火の嫁」の、八雲紫さん」

止めてくれ、俺が死ぬ。

「八雲紫よ、確か桜火が6〜11歳まで私が育てていたわ」

「で、こっちの狐の尻尾が生えてるのが「桜火の嫁」、って！橙！
？」

ちよ、マジで止めてくれ、俺の命にかかわる。ほら、死神が見え
てきた。もういいや、腹いせに元凶のスキマ妖怪をピチュらせよう。
「ちよっと邪魔が入ったが、俺を育ててくれた八雲藍さん」

「紫さまの式の八雲藍だ、よろしく頼む」

うん、やっぱ藍はいい妖怪（人）だ。あのスキマ妖怪とは格が違
う。

「最後が猫又で「桜火の娘」って！今度は藍かよ！？」

藍まで俺を殺したいの！？俺この話の後生きてるよね…。

「まあいいや、もうこの際スルーしよう。で、猫又で、藍の式の橙
だ」

「桜火さんには、こっちの世界で命を救ってもらいました。まだ八
雲の名を持っていますんが橙と申します。よろしく願います」

これであらかた自己紹介は終了か、この後は俺の処刑タイムか…

……あれ？でも俺の処刑が始まらないな？どうしたんだろう。

と、思ってみんなのほうを見ると、みんなあんぐりと口をあけている。

「はい質問です」

少し待つと、理子が手を挙げる。

「何だ？」

「3人って妖怪だよね？」

「ああ、そうだが。SSRには話すなよ？」

「分かった。で、3人は妖怪の中でもそれなりの権力があるんだよね？何で桜火の育て親になったの？」

なんだ、そんなことか。

「俺がこの家から追い出されたときに、ガキからいじめられていた猫状態の橙を見つけたんだ。それで助けたら藍達に来て、行き場のない俺を引き取ってくれた。それだけだ」

「ふん。分かった」

ふう、これで妖怪関係の事は学校にはばれないか。

そう思っていると、今度は姉さんが手を挙げる。

「こつちの世界ってことは、紫さん達の世界って違うところにあるんですか？」

「まあ、そうだな。紫達は『幻想郷』って場所に住んでいて、俺の育ったところでもある」

幻想郷については…やっぱりwikiでお願いします。

「二つ目の質問です。紫さんは、桜火とどんな関係ですか？」

「育て親が一番近いかしら？夫婦がいいけど」

お前は保護者。

「それじゃあ橙さんは？」

「命の恩人です」

助けたが…まあいいか。

「藍さんは？」

「夫婦だな」

ちよ、おま！？当人も知らないところで俺結婚してた！？つか俺

17 なんだけど、大丈夫？

俺がそのように反応すると、紫はとんでもないことを言うてくる。
「あら、桜火はまだ17だったの？それじゃあまだ『許嫁』か、『婚約者』辺りかしら」

え？俺まったく聞かされて無かったけど…

「何を言ってるの？桜火、あなたは私の家族でしょう？家族はそのリーダーに従う。それだけでしょう？それにあなたの父親にももう話は通っているわよ」

あの親父め。ほぼ絶縁状態だったから俺をどう扱ってもいいのによ…

もうそんなことはどうでもいいのでため息をついて座ると、真樹から襟首を締め上げられる。

「おい！桜火、お前武偵中で告白を全部断ったと思ってたらこういうことだったのかよ！」

「いや、俺も今回初めて知った。あと、告白断ったのは興味がなかったからだ」

ミシイ！バキイ！

隣では、完全にキレた姉さんと、面白そうだから参加している理子がタッグを組み、藍と闘っている。

つか、部屋片付けたのにまた壊すなよ…

「すまん紫、俺達を結界で守ってくれないか？俺は妖怪じゃないからこつちでは霊力が使えないんだ」

「まあ、いいわよ？あなたなら壁くらい作れるでしょうけど…」

「紫、その話駄目だ。俺はそれを隠してるからな」

そう、俺はある能力を隠している。知られたら世界の色々な犯罪組織が俺を狙ってくるだろう。

「それならいいわ。…はい終了」

「すまないな…。今度そつちに一度帰るよ」

でも、どうやって帰ろう…？こつちから紫に連絡が取れたらいいんだが…

そんな不安が顔に出ていたらしく、紫は

「あら、帰路の心配はないわよ？もともと藍はこっちにおいて帰る予定だったから」

「そーなのかー、と俺はつぶやく。でも藍どこで暮らすのだろう？そう思つて紫に聞くと、

「あなたの家よ」

「ほんととかよ、俺の家が戦場だな」

ときどき理子も来るし、戦場になるのは確定だな。というよりは俺の部屋が戦場だ。

「まあ、いいか。それより紫、そろそろ止めさせないか？」

「このままでいいんじゃない？藍と互角に戦える人間って言ったらあなたと霊夢と魔理沙辺りくらいだと思っけれど？」

その通りだ。2人がかりとはいえ、藍と互角に戦っているのだ。

紫が驚くのも無理はない。

…まあ弾幕を使えば2人では勝てないんですけどね。

そのまま5時間ほど戦闘は続き、俺の部屋はやっぱりベッド以外は廃材になっていた。

「お前達…かなりしぶといな…」

「そりゃそうよ…私には家族がかかっているんだから…」

「遊びで参加したつもりが…いつの間にか本気になってたよ…」

全員が息切れ状態で床に座ってるのを見ると、俺は止めに入る。

「はいはい、ストップ。藍、お前は本気を出さないなら闘うな。結界でも動きを止めることはできただろう？」

そう言つて藍に言い聞かせると、藍は凶星を突かれたように黙る。

「すまない桜火…だが私にも譲れないものがあつた。そこは分かつてほしい」

「そこは分かつた。ただし本気はぜつたいに出すなよ？現状では俺が紫しか止めることができないからな」

藍から闘う気が無くなつたのを確認すると、理子と姉さんに向き直る。

「姉さん、理子。どんな事情があつても藍達とは闘うな。まず闘えば場合によつては俺も死ぬ、それくらい強い。そこは分かつてくれ」俺は実際にあり得ることを2人に言うと、珍しく姉さんが反論してきた。

「でも、人間と妖怪が家族つて言うのはおかしいと思うのだけれど……」

「そんなことは分かつている。ある人にも注意されたからな」そこを言うと、八雲一家の3人は顔を険しくする。

「でもな、人間と妖怪つてだけでおかしいつて言うのなら、俺はここを出て行ってまたあつちに住む。実際に言う俺は人間だが、中身はぼ化け物に近い感じだ。だから俺はこつちでは生きていけない。俺は種族だけで差別をするのは嫌だからな」

そこまで言うと、姉さんも何も言えなくなる。だが、今度は理子が口を開く。

「じゃあ、おうくんはどんなところが化け物なの？その紫色のは空間を移動できる。その狐は化け狐つてこともわかる。その猫もね」

俺はこの能力を出来る限り使いたくない。このことはまだ話す準備ができていないのだ。

「そこは無理だ。こつちでは色々問題があるからな」そうじゃないとどうなるかわからない。

「俺はこつちの世界も好きなんだ、だから争わないでくれ……」

あつちに帰るとこつちの知り合いには会えなくなる。そこは一切避けたい。

「お前らバカじゃねえの？」

そこで突然、今まで黙っていた真樹が言葉を放った。

「さつきから聞いてたら何だ？化け物といるのがおかしい？じゃあペットなんかはどうなんだよ。あつちから見ればこつちは化け物だ、それと変わらないことだろ？それと峰、桜火に化け物が聞いてどうするんだ？化け物だつたら避けるのか？もし化け物だつたとしても

桜火は桜火だ、変わりはない」

真樹から発せられる言葉に、俺は目を見張った。普通、知り合いが化け物だと知ったら避けるだろう。真樹の言葉に、俺はうれしくもあったが悲しくもあった。

「真樹、言葉としてはうれしいが観点は人それぞれだ。無理強いにするな」

「無理強いなんてしてねえよ。俺はこいつらに聞いているだけだ、桜火の事をな」

その時の真樹は、かなり頼もしかった。俺なんてちっぽけに思えるくらいの頼もしさだ。

「理子は…関係ない。桜火が化け物でも関係ない」

「もちろん私もそうよ、桜火。変なことを言ってごめんなさいね」

「真樹…ありがとう」

「話がついたところで、わたしたちは帰るわね。藍、しっかり花嫁修業してくるのよ?」

おいスキマ、この雰囲気壊すな。

その後は各自部屋に戻り、俺はソファに身を沈めると、藍が部屋に入ってきた。

「桜火、あれはすまなかった。私が戦闘さえしなければ、あんなことには…」

「いいんだ、藍。いずれは話すことだった。それが早まったただけだ」俺は、藍を振り払うように言くと、藍は凄く珍しく食い下がってきた。

「だが、いずれ話すということは、桜火は話す準備ができてなかったと思われる。だから苦しいのなら言ってくれ、泣きたいのなら泣いてくれ、それくらいしか私には出来ない」

まだ準備ができてなくて傷ついていた俺は、その言葉で決壊したダムのように涙を流した。

そのまま泣き続け、俺は泣き疲れて眠ってしまった。

5 (後書き)

(4) 。

やってしまったた…ついに東方を出してしまった。気に入らない人は戻るを押してもらって、この小説を脳内のごみ箱に入れてもらって構いません。

6（前書き）

まだ週間アクセスが増えてるってことは、みなさん大丈夫ってこと
なんですかね…？

一応感想もらえるところらしいです。

翌日、いつも通り6時30分に起きると、リビングには真樹、理子、姉さん、藍の4人が集まっていた。

「おはよう」

「「「おはよう……」」」

「おう」

俺が挨拶をすると、藍、理子、姉さんは気まずくとも返事をしてくれた。真樹は中学の頃のように返事をしてくれる。

「で、お前の姉ちゃんの護衛はどうするんだ？」

真樹は俺と理子の来た目的について話す。

「潜入捜査はせずに、『鷹の目』をするつもりだ。俺はU・Sライフルがあるから遠距離からの狙撃も可能だ」

この依頼では、姉さんにストーカーがいるそうだ。レベルの高い依頼ではないため、『鷹の目』でいいだろう。

「『鷹の目』でいいが、お前視力何だ？」

「左右ともに4.0だ」

目視範囲だと、約1.5kmだ。それにスコープも付けるから、約3km辺りだろう。

「それなら十分だ。俺は武偵高に参加を申し出てくる。それでいいだろう？」

「分かったが、何もないかも知れんぞ？」

依頼の期間は7日だが、ストーカーを捕まえればそこで依頼が終わる。

「了解した」

真樹と理子は情報収集に回ってもらおう。

「真樹は理子とともに情報収集をしてくれ、藍は姉さんように防御結界を頼む」

「分かった」

「おいおい桜火、藍は超偵じゃないだろう？大丈夫なのか？」

まず、藍は武偵じゃない。だが、結界などは信頼が出来るエキスパートだ。問題ないだろう。

「こいつは大丈夫だ、問題ないだろう。さつさと飯食って依頼に行こうぜ」

そして俺達は藍がつくってくれた朝飯を食べ、外へ出た。

「こちら桜火、藍。理子、そっちはどうなっている？」

「特に何もしないが、通学ラッシュで確認しづらい」

こっちから見ても、ラッシュで確認は難しい。

「了解した。藍、結界のほうはどうなってる？」

「大勢で確認は難しかったが、問題はないようだ」

結界にも反応は無いが。人が少なくなるまで待とう。

学校に近くなり、人が少なくなってもストーカー犯は見つからない。ここまで見つからないと、プロではないかと思ってしまう。…プロ？

確か探偵科では尾行の授業があるらしいが、武偵3倍刑があるからそんな武偵はいないだろう。…ただし一応、理子に連絡を取っておく。

「理子、一応尾行に使われそうな道も確認してくれ」

「分かった。少し待ってて」

理子に任せれば1分もかからないだろう。姉さんは学校まで後500メートルもない。早く確認してくれ…理子。

『終わったよ。不審な男を一人確認。おうくんのところからすぐだよ、メールで送るね』

「こちらでも確認した。理子と同じと思われる…って！桜火！？」

「———ありがとな」

さて、こいつを捕まえれば依頼は終了か。

俺はさっきいたビルから飛び降りると地面にあまり反動がないよ

うに着地する。すると、そこで理子からメールが届いた。

「あの角を曲がってまっすぐ行ったところか…」

俺は地面にクレーターを作り、地面をけった。

少し行ったところでたやすく男を見つけることが出来た。

「おい、そのやつ。ここで何をしている」

びくつと身を震わせ男はこっちを見た。

「え…？何って、武偵さんに頼まれて、あの人を見張ってるだけですよ…」

「おい、——」

ほんとの事を言え。と言おうとしたところで頭に声が聞こえる。

——桜火！そいつはオトリだ！——

藍か、ということだ？

——犯人はその男をオトリに使ってお前を遠ざけたのだ！——

おいおい、マジかよ。ならさっさと終わらせねえとな。

「武偵の仕事に一般人は介入不可だ。一応逮捕する」

俺は警察と武偵局に連絡をしてその場を離れて、さっきの声とともに送られてきた場所に向かう。

すると、異様な光景が広がっていた。

真樹が血だらけで犯人と思われる人物と闘っている。

「真樹！こいつはどういうことだ！？」

俺はSSになるのを抑えながら真樹に聞く。

「こいつが犯人だ！まったく見つからないと思ったたらこいつは武偵だったんだ！」

まじかよ。武偵でストーカーとはいいい度胸じゃねえか。

「ねえ、少し黙ってくれないか？」

そっぴいながら走ってきた犯人は、真樹に白銀のナイフと突き立てる。

「ぐふっ…！」

「真樹！」

俺は、地面に倒れる真樹を支えようとしたが、一瞬遅く真樹は地

桜火はつぶやきながら犯人に近づき、
「闇」の柄で犯人の脛を殴りつけた。

膝が折れたのだらう、犯人は声にならない叫びをあげながら地面に倒れる。倒れた犯人に桜火は『漆黒』で斬りつけようとする、ドス！

96

7（前書き）

いい加減にどうしたらいいかな。この作品。
いつも通りの駄文です。

気がつくと、知らない天井だった。

「桜火、起きたか」

隣から藍に話しかけられる。

「ああ。藍、真樹が刺された後、どうなった？」

「SSの第二形態になって、犯人を殺しかけていたぞ」

SS、か…あれを誰にも見られて無いといいけど…

「周りの事は大丈夫だ、私以外だれも見えていない。そして桜火の体だが、切り傷が多く、3日入院だそうだ」

3日入院か、やけに日が高いな、何日たった？

「俺が気絶してから何日たった？」

「1日ほどだな」

アドシアードの前日までか…

「そういえば、犯人はどうなった？」

「あの後來た理子が連れ去って行ったぞ」

そうか…これで事件は解決だが、不安だ。

「もう、全てをみんなに話すよ」

「心が決まったのか。桜火がそれでいいならいいが…いいのか？」

「俺は、大丈夫だ。話すって決めたんだ、なら良いも駄目もないし、それに…藍もいてくれる」

桜火がそういうと、藍が顔を赤く染める。

「いきなり恥ずかしいこと言わないでくれ、調子が狂う」

そんな感じで、桜火が藍をからかっていると、病室に、姉さんと理子が入っていた。

「おうくんってすごいね！さすが女誑し！」

「桜火、退院したらわかってるよね？」

「なんで俺が誑しだ！」

こんな日常が、ずっと続けばいいのに…

「ねえ、ほんとに帰るの？」

3日後、空港で姉さんが話しかけてきた。

「まあな、俺にはあっちのほうがいい」

「分かった。でも、年に1回は帰ってくること！いいね！」

「分かったよ、その時は友達も連れてくる。それじゃ」

姉さんと別れ、飛行機に乗ると、藍がつぶやく。

「いいお姉さんだな」

「？藍、何か貰ったのか？」

「ああ、桜火の女装写真をな」

「理子ももらったよ〜！」

「お前ら…いい加減にしろよ…」

こうして、平和なフライトとなった。

桜火は東京に帰ってくると、藍を部屋に入れ、荷物の整理をして
いた。

「藍、そういえばお前の荷物はどこにあるんだ？」

俺は藍がここに来る時手ぶらだったことに気づき、藍に聞いてみ
た。すると、

「荷物はここだ」

と、服の中に入れていた尻尾を出す。そこには大きめのバックが
あった。

「分かった。じゃあ藍、この部屋を使ってくれ」

俺は、俺の部屋の前の部屋を指して藍に言ったが、藍は機嫌が悪
くしたようだ。

「…桜火、昔と同じで一緒の部屋じゃ駄目なのか？」

そんなのダメに決まってるだろ、と言おうとしたところで扉が大き
な音を立てて開いた。

「先輩！今の話、本当ですか！？」

間の悪い状態で入ってきたのは、俺の後輩のマイだ。

「……ああ、でも昔の話だ」

俺が正直に答えると、マイは「予想通りだ……」などつつばやいて
いる。

「じゃあ、この人はなんですか？」

「俺を育て「桜火の婚約者だ」って藍！？」

おいおい、マイがフルフル震えだしたぞ？

「……………先輩の、バカああああああ！！！！！！」

「ぐふう！」

マイが脚のホルスターからコルトダブルイーグルCDEを抜き、俺の鳩尾に撃ち込んで
来やがった。

……………こんなときだけ、うまく撃つなよ……。

俺が気絶したのは言うまでもない。

目を覚ますと、寝室のベットの上がったようだ。

「いててて、マイのやつ、射撃のランクはDなのに綺麗に打ち込み
やがって……」

マイから撃たれた弾は、見事桜火の鳩尾をとらえ意識を刈り取っ
て行った。

「桜火、大丈夫か？」

ベットの横にいる藍が心配してくれている。こういうとき、かな
りありがたいな。

「ああ、大丈夫だ。若干痛みは残っているがな」

藍を心配させまいと、出来る限り軽く言つと藍は「ふう……」とた
め息を吐きながら安心したような表情をする。だが、それも一瞬。

「あの小娘、わたしの夫に怪我させてくれるなんていい度胸じゃな
いか……」

なんて黒い言葉を吐いている。

「いやいや、あれはお前が俺の婚約者とか口走るから俺がこんなに

ダメージを受けてるんだろ。自分で思うことは大いに結構だが、外で言うのはやめてくれ」

「す、すまなかった…」

藍の失敗に口を出していると、インターホンが騒がしく鳴る。

「ピンポピンポーン」

何か嫌な予感がする。正直この鳴らし方はアリアしかない。だがこの光景を見られると風穴を開けられることは確実だろう。

「藍、ここからはでてくるな。絶対にだ」

「分かった」

まだ痛む体で玄関に向かって扉をあける。

「やっぱりアリアか。で、何の用d——」

「遅い！ちよつとあがせてもらっわよ」

勝手に俺の家に上がってくる。おいおい、こいつにプライベートというものは関係ないのかよ。

「臭いわね」

「悪かったな、この部屋は1週間掃除してないんだ。仕方無いだろう？」

この部屋は空けて1週間になるため、掃除はしていない。多少匂っても文句を言われる筋合いはない。

「違うわよ、少し獣臭いのかしら。まあそんなことはいいわ。それより聞いてよ！キンジが『魔剣』の話を信じてくれないのよ！」

「おいおいどうした。最初から話してくれ」

——少女説明中——

「で、『魔剣』が近づいていることをキンジに伝えたら、「そんなものはいない、お前の『いて欲しい』っていう感情が『いる』ってことを決めつけてるんだ」って言われたのか」

「そうなのよ、キンジにはどれだけ危険かが分かかっていない！桜火からも言っちゃってよ！」

キンジのやつ、お前はアリアに言ったことの逆じゃないのか？『いないで欲しい』って感情が『いない』って決めつけているんじゃないか？

「分かった。キンジに話しておくよ」

「ほんと！？ありがとう！」

それじゃ、決めたことだし、アリアを外に出してさっさと行ってくるか。

「アリア、俺はすぐ行くから自分の寮にかえれ」

「分かったわ。ありがとね」

アリアを見送ると、寝室に戻る。

「それじゃ、藍。俺少しでてるから部屋の掃除少し頼めるか？」

「私に何を聞いているんだ。部屋の掃除は妻の役目、すぐに終わらせるから大丈夫だ」

この九尾は…まあいい。

「その発言を外でしたら追い出すからな。それじゃ行ってくる」

「分かった」

掃除関係には藍で大丈夫だろう。アイツは紫の手伝いで毎日家事をやってたからな。

そんなことを思いながら、俺は探偵科、男子寮に向かった。

「おう、キンジ」

「桜火、依頼から帰ってきたのか。お疲れだな」

まだ持っていた鍵でキンジの部屋をあけると、キンジが中から出てくる。

「アリアとケンカしたんだって？『魔剣』のことで」

「誰から聞いた？」

「アリアから直接愚痴りに来た」

「はあ、アイツは…桜火、あいつが一方的に悪い。『いて欲しい』の感情が『いる』と決めつけているんだ。あいつの言葉は信じなくていい」

「はあ、こいつはアリアから聞いた通りだな。こいつの目をいい加減に覚ましてやらないと、アリアが可哀そうだ。」

「キンジ、先に言っておくが『魔剣』はいる」

「はあ？お前も勘とか言わないだろうな？」

「勘じゃない。事実だ」

俺の予想が正しければ、俺の知り合いが『魔剣』だろう。

「理由は、多分『魔剣』は俺の知り合いだ」

「はあ？それってどういうk——」

「それじゃ、俺帰るわ」

俺は、叫ぶキンジを後に部屋を出る。

まあ、こんなものでいいかな。そうだ、狙撃科に顔を出しておこう。

狙撃科につくと、まだ数人の生徒が残っているようだ。

「先生、だいぶ前に言われていた狙撃の試験に来ました」

「神代か、分かった。ただし俺はいま手が離せないからレキにしてもらってくれ」

レキか。アイツはアドシールドで狙撃の競技にでるんだっけ？凄いな。

「そこ辺りにレキがいると思う、ちゃんと伝えてくれ」

「分かりました」

狙撃科の中を歩いて行くと、レキの姿を発見することができた。

「レキ、先生に頼まれたんだが、俺の狙撃の試験官をしてくれないか？」

「はい、分かりました。ついてきて下さい」

そう言ってレキは歩き出し、屋上に連れ出された。

「あの的は500mおきにおいていります。最長は5kmですので、好きなところから撃つて下さい。後は微調整します。銃は好きなのを使ってもらって構いません」

レキの指す先には、縦横1mくらいの的がある。要はあれを狙えってことか。

「分かった。それじゃ… U・Sライフルがいいか。持ってるし」
「それでは始めてください」

最初は、2 km 辺りでいいかな。

ドオン！

「中心に命中を確認しました。次は2・5 km お願いします」

2・5 か、まだ限界視力には達してないが行けるだろう。

ドオン！

「… 中心に命中を確認。微調整します」

「いや、3 km でいいよ」

ドオン！

「… 中心に確認。ランクは必然的にRと判断します」

「ありがとな。それじゃ帰るわ」

これで試験は終了か。たしかランクは…

強襲科—— S

諜報科—— S

狙撃科—— R か。最初から狙撃科選んどけばよかったな。

帰宅し、リビングに行くと、藍が料理をしていた。

「藍、掃除だけでいいって言っただろ？」

「いいじゃないか。それに桜火も久しぶりに食べたくないか？ 私の料理」

藍の料理は… 悪くはない。むしろ俺にとっては好きな部類に入らう。

確か、藍はいなり寿司とかきつねうどんが好きだったな。冷蔵庫に揚げが入っていたはずだから、お礼に作ってやろう。

「わかったよ。おかずは藍が作ってくれ。ご飯は俺がいなり寿司を作ってやるよ」

「本当か！？ 本当だな！？ 大好きだ桜火！」

「おい藍！ いきなり告白紛いの事を言うな！ 俺が恥ずかしい！」

「やったぞ！ 久しぶりに桜火のいなり寿司が食べれる！」

いなり寿司と聞いたとたんに藍が抱きついてきてトリップしてしまった。

おい、藍。少しどいてくれ。抱きついてるせいでいろんな所が体に…

結局このまま藍を黙らせるのに1時間使ってしまった。

7（後書き）

原作離れしすぎだろ、俺。

現在東方の二次創作も執筆中なので、あげた時に見てもらえとうれしいです。

感想よろしくお願いします。

8 (前書き)

もう今回でジャン又編終わらせませうね。

原作とはほとんど違っているので、原作好きの方はご遠慮ください。

翌朝起きると、完全に寝坊したらしくもう12時を回ろうとしていた。

「やべえ、アドシールドを見逃す！」

桜火は依頼の件でアドシールドの参加自体が免除されている為、別に見なくてもいいが、Sランクの桜火でも少しは勉強になる。が

……

「おい、藍。何故お前が俺の布団で寝ている？」

桜火の隣には、寝ぼけ眼をこする藍がいた。

藍のヤツ、基本的に早起きだったと思うが…疲れてたのか？

「おはよう、桜火」

「ああおはよう。で、藍。なんでお前が俺の布団で寝ている？」

「桜火から、どの布団を使っているか聞かされていなかったから、というのが理由だ」

おい、普通は使って無い布団を使うだろ？

「教えていなかったことは謝る。だが普通は使って無い布団を使うだろう？本心は何だ？」

「久しぶりに桜火と寝たかった」

「よし、お前は一週間飯抜きだ。妖怪は飯食わなくても生きられるだろ？」

妖怪は飯を食わなくても生きられるが、腹は減る。そこを利用したお仕置きのつもりだ。

「すまん、二度としない、許してくれ」

「よろしい」

藍は素直だから扱いが楽だ。まあ、そこらへんが可愛いと思うが、もちろん可愛いって言うのは異性的にではない、と思う…

「じゃあ藍、俺は今からでるがお前は どうする？」

俺は藍から見えないように防弾制服を着る。顔は女といわれるが、

これでも男だ。藍だあつても着替えは見られたくない。

「もちろん一緒に行くぞ」

藍はもちろん、といった顔でうなずく。

「それじゃあ人間に擬態しろ。ここ辺りには妖怪とかを狩るのが専門みたいな輩もいるんだ、なるべくばれないようにしろ」

「分かった」

藍が人間に擬態するときには時間がかかる。より正確に化けるためだ。

「じゃあ先に出しておくからな」

俺は寝室からでると、朝飯を作り始める。ごはんは卵焼き、味噌汁に焼き魚といった和風のメニューだ。

「終わったぞ」

寝室から藍がでてくる。腰辺りまで伸びた癖のない金髪、ドレスのような服はいつもと変わらないが耳としっぽが無くなっている。

「相変わらず上手いな。とても妖怪には見えない」

まあもともと妖怪には見えないがな。という言葉は黙っていた。

その後は飯を食って、後はでるだけ。という風に進んだ。

「藍、でるぞ」

俺はベランダのさくに手をかけて藍を呼ぶ。ここは女子寮だ、迂闊に玄関から出れば叫ばれるのは確実だろう。でも場所は3階、一般人だつたら怪我するだろう。

「よつと」

まあ、そんなこと俺には関係ないがな。

後ろに藍が続いて降りてくる。今の藍はドレスみたいな服ではなく、Tシャツにジーパンだ。あんな服で歩いてたら不審に思われるからな。

「おお、不知火じゃないか。終わったのか？」

強襲科棟の近くで不知火を見つけた。

「ああ、桜火君じゃないか。後ろの女性はだれだい？」

「俺を育ててくれた家族の八雲藍だ」

「八雲藍だ。家の桜火のお友達だな、よろしく頼む」

さすがに外では言うなって約束を守ってくれてるか。

「私は不知火亮です。桜火君にはよくお世話になってますのでよろしく願います」

やっぱり不知火は礼儀が正しいな。凄く勉強になるな。

「ところで不知火、競技はどのくらい終わった？」

「後は狙撃科の射撃くらいだね」

「分かった。ありがとな」

狙撃科か。レキの射撃でも見て行こう。

狙撃科に来てみたが。競技まで後30分あるらしく、かなり暇だ。

「藍、俺は寝るから緑色の髪で、黄色い目をしたやつにやったら起こしてくれ」

「分かった。任せてくれ」

なぜか凄く眠いな。疲れはとれているはずだが…

「……………かつこいい」

隣からきこえた藍の声は無視した。

「桜火、お前が言っていたやつの順番が来たぞ。起きろ」

「了解つと」

藍が言った通りレキの順番になっていた。時間は4時30分、寝てから3時間ちよつとか。

「ん？どうしたんだ？」

世界記録目前でレキがレーンから離れた。レーンから離れると失格になるはずだ。

——何やってるんだレキ！——

レキの近くの男たちがレキに怒鳴っている。だがレキは電話をしているようだ。

ボオン！

いきなりレキが窓を開けて発砲した。

「桜火、あの人間は何をやってるんだ？」

横から藍が聞いてくる。

「さあ、俺にもわからん」

またレキが撃つ。複数発撃つと、レキは退場していった。

「何がしたかったんだ？」

結局何も分からずに競技を見終わると、狙撃科の外に出る。

そこで突如、武藤から電話がかかってきた。

「どうした？」

『桜火！不知火にさっき会って聞いたがお前帰ってきたんだな！』

「ああそうだ」

武藤の声に若干の焦りが感じられたが何かあったんだろうか。

『ケースD7だ！星伽さんが失踪したらしい！』

ケースD、アドシアード内で事件が起こった時にでるものだ。

だがD7となると、事件かどうかは不確定で、特定の者に通達して極秘で裏解決せよ。というものだ。

携帯を確認すると、確かにメールが来ていた。時間的にアドシアードの見学中で周りの騒音で聞こえなかったらしい。

俺は確認すると、すぐさまレキに電話した。

『はい、レキです』

「レキ、今からどこか排水溝に行くための穴で不自然なところは無いか探してくれ」

犯人は多分、浮遊島の上ではなく中に行くだろう。

『はい……第9排水溝のところに違和感があります』

「そうか、ありがとう」

確か第9排水溝は確か地下倉庫ジャンクションにつながっていたはずだ。

「藍、ついてきてくれ」

「分かった」

俺達は急いで地下倉庫へと向かった。

「やっぱりか」

地下倉庫へ行くための梯子の扉が開いている。

「少し足跡があるから入ったのは2〜3人だろう。藍、行くぞ」

「了解した」

俺達が下に降りると、意外なメンツがいた。

「アリア、キンジ。何やってるんだ？」

「桜火、『魔剣』が出たのよ」

「ああそういうことか」

道理で気温が若干低く感じるのか。

「で、桜火。その女性は誰よ」

「俺を育ててくれた家族の八雲藍だ」

俺は不知火の時と同じようにアリア達に紹介する。

「八雲藍だ。よろしく頼む」

「神埼・ホームズ・アリアよ、よろしく」

「遠山キンジだ、よろしく」

—— けほっけほっ ——

「白雪！大丈夫！？」

アリアが白雪に駆け寄る。

何か違和感がないか？

「白雪、唇、大丈夫か？」

「ううん、大丈夫」

キンジ、お前、成ってるな？

「血が出ていただろう、見せてみる」

「大したことないよ、口の中を切っただけ」

違和感の正体がわかった。こいつが『魔剣』だ！

「アリア逃げろ！」

俺とキンジが同時に叫ぶ。多分やつ狙いはアリア、俺達には目もくれないだろう。

だが少し遅く、アリアは捕まってしまった。

「やれやれ、『無限剣』が付いていながら、捕まるとはなかなか弱いな。ホームズ」

「『無限剣』ですって！？どこにいるのよ！」

おいおい、隣の俺だよ。

「お前の隣にいる男、神代桜火、イ・ウーの裏切り者であり『無限剣』だ」

「桜火！あんたが『無限剣』なのね！？イ・ウーのボスと力量は同じで元N02で犯した罪は全くないって言うのは！」

よくそこまで知ってるな。こつちに情報を出した覚えはないぞ？
「ああそうだ。つかジャンヌ、勝手に人の個人情報ばらさないでくれるか？あと俺は裏切ったんじゃない。退学させられたんだ」

『魔剣』ことジャンヌは何も言わず、アリアの両手に息を吹きかける。

「くっ！」

そのとたんアリアは焼き鏝でも当てられたような動きをする。その手を見ると、凍っていた。超能力で凍らせたのだ。

「おお強くなったな、ジャンヌ」

俺は『焰』と『火炎』を抜きながらジャンヌに突っ込む。

「ちい！」

ジャンヌはアリアを開放し、自分の変装を解きながら後退する。

俺はアリアを後ろに下がらせながら何も無いところに視線を移す。

「白雪、アリアの手当てをやってくれ」

「分かった。アリア、少ししみるから我慢してね」

コンテナの上から白雪が出てくる。

白雪がアリアに治療を始めることを確認すると、俺は『焰』と『火炎』を直し、1本の細身の大剣を取り出す。

「あれは、デュランダルに似てるけど…違う？」

アリアに治療を施しながら白雪は俺の剣に疑問を持つ。

「藍、あいつらの周りに結界を張ってくれ」

「分かったが、桜火はいいのか？」

「俺は大丈夫だ」

藍は一瞬悲しそうな顔になると、しぶしぶうなずいてくれた。

「桜火…死ぬなよ」

「俺がそう簡単に死ぬと思うか？」

俺は藍に簡単な冗談を言う。

「まあそうだな。私を倒せるくらいだ、死なないだろう」
そういいながら擬態を解く。

「あ、あれ！？玉藻さま！？いや…違う」

「いや、わたしの昔の名前は玉藻前だ。間違っではない」
藍が結界を張ったのを確認すると、俺は藍に話しかける。

「それじゃ、幼馴染にお仕置きしてくる」

俺はそのままかけだす。

「桜火！お前と闘うのは久しぶりだな！」

ジャンヌはデュランダルを抜いて応戦しにくる。

「ああ、そうだな！」

ガギン！

俺の剣とデュランダルが交錯し、火花を散らす。

「剣術は昔より上手くなったみたいだな。能力を混ぜた戦闘はどうだ？」

俺は超能力を使い近くにあったがれきをジャンヌに投げつける。

「そんなもの、とづくに体得してるぞ！桜火あ！」

そう言っでデュランダルを氷でコーティングしてがれきを切り捨てる。

「へえ、それならどうか？」

俺は周りにあった数百個のがれきをジャンヌに向かって放つ。

「容易い」

ジャンヌは自身の周りに氷の壁を展開し、がれきを止める。

「あれが超偵同士の戦いなね…」

隣にいるアリアという娘が桜火と魔女の戦闘を見てつぶやく。

「星伽の巫女、桜火からの伝言だ」

「はい、なんでしょう」

この巫女は力が優れている。桜火の4分の1ほどだろう。

「俺がすきを見てジャンヌを止める、そしたら結界をでて、デュ

「ランダルを折れ」だそうだ」

「はは、桜火さんは難しい注文をしてくれますね」

この娘は、妖怪の山の神の巫女に近い雰囲気を感じる。一途なのだろうな。

「でも、出来ないことはありません」

「どうしたジャンヌ、もう息切れか？」

目の前のジャンヌは肩を上下させ、息を荒く吐いている。

「こんなものではない！『オルレアンの氷花』！」

「はあ、こんなものか。ジャンヌ、もう終わりだ諦めろ」

迫ってくる氷を対超能力仕様の柄で打ち消し剣を投げると、空中から切りかかってくるジャンヌのデュランダルを止めた。

——真剣白羽取りで

「今だ！白雪！」

藍に、伝言を頼んでるから大丈夫だろう。後はこの剣を折るだけだ。

「はい！星伽候天流、緋緋星伽神！」

白雪は、居合斬りの動きで、炎を灯した刀でデュランダルに斬りかかった。

バキン！

ジャンヌのデュランダルが根元から断ち斬られた。斬られたジャンヌは茫然と立ち尽くしている。

「ジャンヌ・ダルク30世、逮捕よ！」

いきなり結界から飛び出してきたアリアがジャンヌに対超能力者用の手錠をかける。

そして、地下倉庫から連れ出されるジャンヌに一言言っておく。

「ああ、そうだジャンヌ、お前が使っていた剣、デュランダルじゃないから」

「は？」

一応気を取り戻したジャンヌがこっちに疑いの視線を仕掛けてく

る。

まあそうだろうな。教授以外誰も知らないし。

「お前が使っていた剣は、俺が自作した偽物。本物は俺が使っていたほうだ」

「なぜそんなことをした」

「お前の事だ、デュランダルの方に頼ってばかり成長しそうだったからな。俺はそういう風に成長してほしくなかったからな」

ジャンヌが驚いた顔になっている。ああ面白い。

「あと、もう少し言葉のとげをなくせ、可愛い顔なんだ、どうせならもっと可愛くなるうぜ」

「わ、わたしがかつ可愛いだと!？」

顔が真っ赤だ、やっぱ可愛いからもっと可愛いほうがいいな。

「そっそれでは桜火は、そっちのほうがいいというのだな!？」

「ああ、そうだけど」

なぜ俺の話になる？

そんなことを考えていると、アリアから「こいつさっさと連れて行くわよ」と視線で言われる。

「ジャンヌ、また今度な」

そう言っただけ俺は地下倉庫から出て行っただけ。

後日聞いた話だが、役に立った割合では1割俺、2割白雪、3割アリア、2割レキ、1割藍らしい。アリア、お前逮捕以外何もしてないだろ。

8（後書き）

さて、ジャン又編完結させましたがいかがだったでしょうか？まあこの際何を言われても何も言えないです。はい。
次回からはオリジナル編にします。

感想待ってます

a c t 2 ・ 5 オリジナル編 1（前書き）

今回からオリジナル編です！面白くないと思いますので、面白くないと思ったら感想でダメな理由と改善方法の記入をお願いします！

俺達はジャンヌの逮捕後、平凡な毎日を過ごしていた。

「暇だな」

「暇ですね」

「暇だ」

「暇ね」

俺、藍、キンジ、アリアの4人は、俺の部屋の机に頭を付けて同時につぶやいていた。現在の時刻は6時30分。みんなかなり早起きして暇だから俺の部屋に来たという。

その中で俺は、一つの暇から抜け出す方法を見つけた。

「藍、今日の学校が終わったらあっちに帰るから準備しておいてくれ」

「分かりました。何時ごろ帰宅ですか？」

「5時30分ごろかな」

俺が藍とそんなやり取りをすると、アリアが食いついてきた。ついでだが、藍の事は、アリア達には話してある。

「あんた達今日どこに行くの？」

「いや、少し実家に帰ろうかとね」

この話をアリアの前でしたのが間違いだったことを今更後悔してしまった。

「そう、なら私も行くわ」

「桜火、俺もお前がどんな所で育ったのかを見てみたいし、いいか？」

なぜか珍しくキンジが参加しているな。どうしよう。

「藍、大丈夫か？」

「紫様は何人でも大丈夫らしいです」

紫のやつ、何かと機嫌いいな？普通だったら俺以外来るなっというのに。

「それじゃ、後白雪と理子も誘うかな？」

——ピンポン

いきなりチャイムが鳴った。

こんな時間に誰だろう？

「はいはい」

「すみません隣に越してきたジャンヌと申しま——」

扉をあけると、いたのは顔を真っ赤にしたジャンヌだった。

「ああ？まあ、入れよ」

「お、おじゃまします…」

「桜火、誰が来たの？」

やばい、戦争は確実だな。

——少女戦闘中——

「で？武偵高に来て何しようっていうの？」

今回の犠牲、壁、床。家具が大丈夫なのはよかった。

「何もしない。私はフランス武偵高からの転校生ということになっている。何かしたらすぐに私の首が飛ぶさ」

少し自嘲気味に話すジャンヌとアリアがにらめっこしている中で、桜火がしていたことは…

ジャンヌも誘うべきか？よし、誘おう。

「あ、そうだジャンヌ。お前俺の実家に来ないか？」

「へ？じじい実家？まだ私たちはまだそんな関係じゃ…」

ゴス

何かパニックリかけたジャンヌの頭にこぶしを落とすと、ジャンヌは黙った。

「俺の実家につてことは、キンジ達と一緒に遊びに来ないか？つて誘ってた」

「ああ、そんなことか。喜んで行かせてもらっ」

「それじゃ、今日の放課後家に集合だ。キンジは白雪に、ジャンヌ

は理子に声かけを頼む」

「分かった」

「それじゃあ解散だ」

号令と同時にみんなが部屋から出ていく。各自の部屋に戻って準備をするのだろう。

「先輩！なんであたしに声をかけてくれないんですか！！」

窓のほうを見ると、そこには窓に張り付いたマイがいた。

「気づいてたがあえて言わなかった」

「何故ですか！？」

「お前は一年だ。一年はこういうことは禁じられている」

「大丈夫です！もう教務科に許可貰って来ましたから！」

うるさい奴だ。つか早すぎるだろ、常識的に考えて。

「うるさいと思えば、あの小娘か。そこからどけ、叩き落すぞ」
やっぱり来た。

「それともスキマツアーが御所望かしら？」

「おいおい、なぜ紫がいる。」

「2対1では分が悪すぎます…今回は引きませんが、実家には行きま
すからね！」

そう言つてマイは下に降りて行つた。

「やれやれ、紫。お前はいつからいた？」

「最初からよ？」

「それじゃあ説明はいらんな。今日そつちに帰る」

「分かつてるわよ。部屋が足りないから桜火はあたしの部屋ね」

「ちょ、おま。なぜ俺が紫と同じ部屋に？そこは藍か橙でいいだろ。」

「紫さま！桜火は私の部屋です！」

おい、藍お前も参加するな。話がややこしくなる。

「はい、その話ストップ。俺は幻想郷にさえいれば能力は使えるから、お前らの部屋に世話にはならない」

「だがお前は能力を隠しているんだろ？それなら世話になったほうがいいだろ」

藍からの的確は指摘に息が詰まる。ある程度は覚悟したが、まだ完全には覚悟しきつてない。

やっぱり藍にはかなわないか…

「分かったよ。それなら俺は藍の世話になるかな」

俺がそんな風に言っていると、紫は「なによ、藍ばかり…」とかぼそぼそと呟いていて、藍は思いつきり俺に抱きついてくる。

ちょ、藍。いきなり抱きつくな！色々あたつてるぞ！

「藍！俺は学校の準備と向こうに行く準備があるからどいてくれ！」
だいぶやばいな、おもに俺の理性が。つか、これ見よがしと紫も突っ込んでくるな！ほんとにやばいから！俺の理性が！

なんとか紫と藍をひきはがし、俺は準備を終えるとさっさと学校へ向かった。え？まだ時間が7時だって？気にしない気にしない。俺には行くところがあるからな。

学校に付くと、俺はすぐさま装備科へ向かった。

俺は「ひらがあや」と書かれた扉にノックすると、中から声が聞こえてくる。

「あいてますのーだー」

「おじやまするぞー」

俺はそのまま入っていき、銃のパーツや骨組みが積み上げられている山をかわす。絶対に片付ければもう少しは無くなるな、この山「頼んでたものは出来てるか？」

「できてるのーだー。M92fのほうはフルオート可能、反動軽減に、50発のロングマガジンで、さらにサプレッサー付きなのだ！」

正直この人は凄いと思う。普通だったら、フルオートに反動軽減の時点で断られてるしな。

「で、もう片方は、さっきと同じ機構で50・ACE弾と9mmパラペラムが使用可能なのだ！」

よく無理なこと出来たな？まずm92fに50・ACE弾なんて使ったら銃がけし飛ぶぞ？

「ああ、ありがとう。報酬はこれだけでいいか？」

平賀さんは、金さえ積みめばなんでも改造してくれる凄人だ。ただし法外な金のせいでAランクどまりだな。

俺は300万ほど机に置く。

「これでは多すぎるのだーもう少し少なくていいのだー」

「大丈夫だ。これから依頼するからな。44マグナムを今日中に改造^じってほしい。改造は薬きよう排出を早く、そして反動軽減だ」

実際これはお土産なんだがな。

「わかったのだー昼までには終わらせとくのだー」

「ああ、頼む」

さて、少し時間もたつたし、教室に行くか。

そんなことを思つて教室に来てみたのだが…

「キンジ、アリア、早いな」

正直早すぎる。まだ7時20分。綴がまだ来ないくらいの時間だぞ？

「準備が早く終わつて…しょうがないから早く来たのよ」

「俺も大して変わらん」

まさか…この二人が同じはんのうをするだと…明日はブリザードだな。おお怖い怖い。

「まさかキー君とアリアが同じ反応をするなんて…明日は吹雪だね。準備しとこ」

俺の隣に理子が来てつぶやく。ん？理子？

「おお、理子。そういえばお前家に来ねえか？ジャン又達も来るぞ？」

「もちろん行きますよーだ」

まあ、こいつの事だし来るのは当たり前か。

「一応言つとくが、出発は今日だ。学校が終わつたら準備して家に来い。後アリア達、持っていくものは着替えと身だしなみを整える物だけだぞ？電気を使うものは極力持つてこないように」

あつちじゃ電気は貴重品だからな。そう簡単に使えん。

俺がそんなことを言つのでキンジ達は口が開いてしまつてゐる。ま

あ理子は大体予想が付いてたのだろう、うんうんと頷いている。

「あと、お菓子を多めに土産で持っていけ。それだけだ」

これ以上話すと、ほかの奴らまで集まってきそうだったから俺は話を切り上げた。

これでは普通に授業を受けるだけだな。午後は渋谷辺りに土産を買いに行こう。そうしないとあの人は必ず怒るからな、それだけは防ぎたい。

俺達はそのまま授業を受け、そこで別れた。

act 2・5 オリジナル編 1（後書き）

作「今回から始まりました！」

桜「作者とキャラクターの対話コーナー」

作「なんでそんなにテンション低いんだ？」

桜「お前のせいだろ！完全に！」

作「え？俺なんかした？」

桜「気づいてないのか…末期だな。…まあいい、それより次回予告だ」

作「あいよー。今回はたぶん桜火が幻想郷に行くと思うZ E！」

桜「作者自重汁。アリアのファンが減ってくぞ？」

作「マジでサーセン。このオリが終わったら原作に戻すんで勘弁してください…」

桜「なんか作者に鬱入ったな。ま、いいか。それでは、次回もよろしく願います」

2 (前書き)

すみません、予定通りのうpができませんでした…
学校の行事って面倒くさいですね…

さて、俺は平賀さんから44マグナムを受け取ってから渋谷に来たわけだが、何を買おう？安くて腹が膨れるものか？スナック菓子か、グミ辺りだな。

「まあいいか。このポテチのチーズ味にしておこう。店員さん、このポテチあるだけお願いしまーす」

余談だが、このポテチには10000円ほどかった。

お土産には何がいいかしら？お土産には甘いものかいいって言うし、ももまんでもいいかしら？確かコンビ二でももまんがいっぱいあるって話聞いたし、20個ほどいいわよね。

桜火に何かお土産買ってこいって言われたが、俺にはただいま金がかほとんどない。さて、どうしたものか。

「何か考えていても仕方ないし、クッキーでもいいか…」

俺は見つけたクッキーを一つ買った。そこまで多くなくてもいいだろ…。

うーん、おうくんには多めに持ってこいって言われたし、どうしよう。そういえば買いだめしていたポッキーがあつたよね？それで済ませよう。10箱ほどでもいいかな？

きんちゃんには、お菓子を持って来いって言われても、聞いたのがついさっきだし、なにも無いんだよね…。どうしよう、向こうで料理を作ろうかな？それくらいしないと、多分迷惑だよね…

さっき理子から聞いたが、お菓子を持っていかないといけないらしい。さて、どうしたものか…。いま家にあるものだと、クッキー

か、カステラくらいだな。なぜフランス人の私の家にカステラがあるかって？それは、カステラが好きだからだ。カステラを5本ほど持っていてこう、そうしよう。

5時がすぎ、帰宅すると、みんな先に来ていたようだ。

「桜火！？なによその量は！？」

アリアが驚いてるのはよくわかる。普通土産に持っていく量じゃないしな。

「残念ながらこのくらいないと、向こうではキツイのでね。少ないと向こう知り合いからの視線がきつくなる」

「あんたの家族ってどういうお腹してるのよ…」

一人で食べるとは、さすがにアリアも思っまい。これを一人で食べると思うと、俺も冷や汗が出てきた。

「それよりほかの人はちゃんと土産持ってきたか？持ってきていない奴は、料理係を強制させるからな」

「あたしはももまんよ」

お土産にももまんは無いだろ。

「俺は、一応クッキー」

多分おk。

「理子はポッキーだよ」

アリアよりマシ。

「私は、きんちゃんに聞いたのがさっきだったから…お料理しようかなって…」

多分白雪が一番マシ。

「私は、カステラだ。お土産には大丈夫だろう？」

一応ジャンヌも大丈夫が…

「先輩！聞いて無いですよ！」

お前は料理作ってる。

正直大丈夫そうなのが3人しかいなかったぞ。先が思いやられる

な…。

「藍、そっちは大丈夫か？」

なんか、藍がいじけて「なんで桜火は女子ばかり連れてくるんだ…？」…何も俺は聞いて無い。

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫じゃないがよしだ。桜火、向こうで話がある」
ちょ、かなり怖い。

「紫、でてきてくれ」
にゆるん！

「…！？」

やっぱり理子以外構えるよな。普通に怖いし。

「まあ、一応紹介するよ、八雲紫。俺の「嫁」って紫！？またか！」
やっぱり皆変な反応するよな…後でピチュらせよう。

「紫、後で話がある」

「ちよつと！冗談よ！頼むからそんな死んだ目で見ない」「ピチュらせるぞ？」「ごめんなさい」

正直、紫の冗談は冗談に聞こえないから怖い。後でO H A N A S H Iしないとな…

「まあ今のはなしで、八雲紫。妖怪の賢者をしていて俺を育ててくれた家族だ。理子はもう知っているよな？あと白雪、妖怪って聞いただけで刀構えるな」

俺が注意すると、白雪は刀を納めてくれた。やべえ、向こうで大丈夫かな？

「再度紹介するが、こっちが八雲藍。九尾で俺の「婚約者」…いい加減にやめてくれ、藍」

もうどうでもいいや…藍も一緒にO H A N A S H Iさせよう。

「すまなかった。どこぞの九尾のおかげで話がそれた。九尾で俺を育ててくれた家族だ。白雪、何度言ったらいい？」

ほんとにやばいな。神社に置いとくか？それとも魔法の森か…。

「まあ、今ので紹介は終了だ。紫、大丈夫か？」

大丈夫じゃなかったらこっちに来てないだろう。と思いながら紫に聞くと、もちろん。と返してくれる。頼もしい。

「それじゃあ、スキマツアーにごあんない」

突如俺達の足元に巨大なスキマが開く。俺は慣れてるが、ほかの奴は初心者なんだ。丁寧に扱ってくれ。

そんなことを考えながら落ちていくと、地面に着いた。
どさつ。

おいおい、やっぱり着地失敗してんじゃねえか。

「ほら、さつさと立て、荷物入れるぞ？」

今の俺達の前にあるのは、金持ちを思わせる大きな家。マヨヒガにある紫の家だ。

「痛いわよ！桜火！」

「俺が悪いわけじゃない、着地に失敗した奴が悪い。藍、こいつらを部屋に連れて行ってくれ、アリアとマイと白雪が客間で、ジャンヌ、理子が同じ予備の部屋、キンジは俺の部屋だ。俺は少し外に居るよ」

「分かった」

さて、俺は外で空気でも吸っておくかな。中で何事もないと『きやあああああ！！！！』『にやあああああああ！！』『ちええええええええん！！！！！！』『遅かった。ま、いいか。あいつらも橙と仲良くなればいいし。』

「こんにちは」文文。新聞夕刊です。あやややや！？桜火さんですか！？」

今来たのは、幻想郷最速の鴉天狗、射命丸文。新聞記者をやっている。

「久しぶりだな。文、5年ぶりか？」

「あやややや、これは本物の桜火さんみたいです……」

いや、俺が本物じゃなかったら誰が本物だ。

「これは号外のネタになります！さつそく制作に取り掛かります！……せやあ！」

やっぱり忙しい奴だ。ん？号外？どうなるかな？

「あら、文が来てたのね？今夜は宴会があるわね……」

「紫、見てたのなら言ってくれ。あとなんで俺がいると宴会なんだ？」

「あら、いつものことよ？」

いつものってなんだ。まったく分からん。

そんな話を紫としていると、家からキンジがでてきた。

「荷物の整理終わったぞ？桜火、なんでお前は金髪に変わってるんだ？」

まあ、驚いても仕方ないか。

「ああ、そんなことか。俺が金髪なのは八雲家の家族だからだ。まあ、橙は藍の娘みたいなものだから例外だがな」

「橙……さつきの猫か」

さすがキンジ、藍に言ったら殺されることを軽々という。そこに痺れる憧れ（ry

「そういえばキンジ、みんなに今夜は宴会だからでてくるように、と伝えてくれるか？」

「ああ大丈夫だ。そうだ、桜火。お前今日どこで寝るんだ？お前の部屋は一人しか寝るスペースないぞ？」

「まあ……藍の部屋に………な」

「お前も苦労するな……」

俺が疲れ切った顔で言うと、キンジは同情してくれる。凄くありがたい。

さて、俺はポテチでも用意するかな。

2（後書き）

作「また来たぞ！対話コーナー！」

桜「テンション高すぎだ。落ち着け」

メキヤア！

作「はいすんません、調子こいてました」

桜「わかったならよし。…だが、やっぱりやっちゃったな」

作「反省はしているが後悔はs（ry」

桜「ネタをご苦労。それで？この先はどうするんだ？」

作「ネタバレを防ぐため言っておくが、次はほとんど宴会だ。いや、下手したらその次もか」

桜「やりすぎだ。次で終わらせろ」

作「わかったよ、それじゃまた次回」

（主人公より立場の無い作者って…？）

3（前書き）

完全に駄文？そんなのいつものことさ。
桜火の髪の色はオリジナル設定です。ご了承ください。

紫のスキマで博霊神社に行くと、幻想郷の主要メンバーはもう揃っていた。紅魔館、白玉楼、永遠亭、守矢神社、地霊殿。どれも桜火の知り合いだらけだ。

「桜火、久しぶり。外でもちゃんとやってるようね」

「もちろんさ、霊夢。それと外の土産だ。酒に合うと思うぞ。あと、こいつと白雪を宴会の料理人に使ってやってくれ」

「ちょ！？先輩！」

「あら、ありがとう」

博麗霊夢。自称楽園の素敵な巫女さんだ。俺に貧乏時の生活方法を教えてくれた人でもあるし、それなりにお世話になった。そしてマイは犠牲になったのだ。

「…桜火？あの人誰なのよ？あとなんで金髪になってんのよ」

今頃かよ。遅すぎるぞ。つか、ほかのみんなも今気づいたような顔するな。

「あの人はこの神社の巫女さんで、博麗霊夢。ここで起こったことの解決などもしている。そして俺の髪が金髪になってるのは、俺がこつちでは八雲桜火になってるからだ。八雲家はみんな金髪だ。橙は例外な」

説明って面倒だな。やっぱりこいつら連れてこなかったらよかったか？

そんなことを思っていると、神社の鳥居のほうから、青いワンピースのような服を着た女性が歩いてきた。

「よう、桜火。久しぶりじゃないか」

「久しぶりですね、慧音先生。妹紅は元気になっていますか？」

来たのは、上白沢慧音。幻想郷の寺子屋の先生をしている。ハクタクと人のハーフで、だいぶ長生きしている。

「妹紅は…いま永遠亭の姫と殺し合いの真っ最中さ」

「またか…あいつらを後で止めてきます」

俺達の会話にアリア達が顔を青くしている。無理もないだろう、いきなり殺し合いときて、それがまた、ときたら誰もが顔を青くするだろう。

「それで桜火、後ろの人間は誰だい？」

「俺の外の知り合いで、神埼・H・アリアと遠山キンジ、理子・峰・リュパン、ジャンヌ・ダルク、それと今霊夢に駆り出されていないが、星伽白雪とマイだ」

一応自己紹介をさせておこうと思ったのだが、まあいいだろう。

「私は上白沢慧音。人里の寺子屋で教師をやっている。よろしく」

「……よろしく（頼む）……」

そんなに硬くならんでもいいだろうが。

「ところでお前ら、常識人の相手をするのと、人外の相手はどっちがいい？」

一応聞いておこう。それにより対応させる奴が変わるからな。

「「常識人で」」（アリア、キンジ）

「「別にどうでもいい」（ジャンヌ、理子）

アリアとキンジが常識人か…アリアは意外だな。

「慧音先生、すまんがこいつらと一緒にこーりんの所に行ってくれませんか？」

「それくらいいいが…そういうことか」

さすが慧音、分かりが早い。

「キンジ、アリア、慧音について行け。常識人と話せるぞ」

そこでキンジとアリアを慧音に任せる。…ふう、これで危険は去って行った。

「さてお前ら、常識人じゃなくていいんだよ「久しぶりですわ、桜火様」咲夜、時止めてくるの止めないか？俺はともかくほかの人がびつくりするだろうが」

理子達に説明しようかと思った矢先にこれだ、咲夜、もう少し気を使ってくれ。

そんなことを考えてると、背中に凄い衝撃が走る。

「桜火く！」

「ごふ！……いつつ、レミリア、飛びついてくるのは下手すると人間やめるからいい加減にしてくれ、言ったはずだろ？」

注意しながらレミリアを離す。やべ、もう少しでヒビ入りそうだった。

「咲夜が勝手に先に行ったのが悪いのよ……。桜火、この子、あなたを見つけた途端に時を止めたのよ？」

「ノノお嬢様、そんなことはありません。それより桜火様、前いただいたコップをもう一度もらえませんか？」

咲夜が頬を赤く染めながら聞いてくる。やばい、何この咲夜かわい「ぐべら！」いきなりなんだ！

そう思って後ろを向くと、空中で巫女がどや顔をしていた。

「咲夜、ちよつと待っててくれ、俺はあの現人神を懲らしめてくる。ついでにその二人に幻想郷としてのルールを教えてやってくれ」

あの現人神め……見つけると弾幕撃つの止めてくれ。

「分かりましたわ」

よし、んじゃちよつくら行ってくるか。

「桜火さん！今日という今日は勝たせてもらいますからね！」

「いい度胸だ。お互いにスペルは2枚、行くぞ！」

早苗の弾幕は以前より改良されていた。全域に展開される弾幕の中に、俺を狙う弾幕が織り交ぜてあり、避けるのには一般人は苦勞するだろう。だがな、こっちは生きるか死ぬかの弾幕をくぐりぬけてきたからこんなものは当たらない！

「早苗！お前の弾幕はこんなものか！」

早苗を挑発し、スペルカードを消費させる。先に相手に使わせれば、こっちが先に無くなる確率は無くなる。さらに、弾幕はすべてグレイズさせ、当たるか当たらないかの場所で避ける。そうすることで、さらに相手は怒り、スペルカードを使わせる。弾幕勝負とは、

心理と技術による戦いだ。

「まだまだ行きますよ！秘術『グレイソーマタージ』！」

そう言って早苗がスペルカードを使ってくる。やっぱスペルカードをそのまま避けるのって面倒臭いな…

「桜符『隙間なき桜の雨』！」

俺は全体に弾幕をばら撒き、その中に大き目の弾幕を撃つ。そして隙間が少なくなったところで、妖力を使って特大の砲撃を行う。周りから見れば、大きな桜の木で桜が散っているような光景になっている。ここでお互いのスペルがブレイクされる。

「召喚『サモンタケミナカタ』！」

さらに早苗はスペルを撃ってくる。弾幕さえ多ければ勝てるのも思っているのだろうか？と思わせるような弾幕を撃ってくるが、全て桜火はかわす。だが、早苗は桜火に全力で向かってきているので、こちらにもこれには応えないといけない。

「これで終わらせてやるよ！剣技『無限剣』！」

弾幕で大量の剣を作り出し、そのほとんどを早苗に向かって放つ。そしてその弾幕に集中させ、残りの弾幕で横から攻める。隙間がほとんどないこのスペル、攻略されたことは紫以外にはない。そのうちの一発が早苗に直撃し、早苗が倒れる。

やべ、強く撃ちすぎたか？

そう思って早苗を抱え、遅れてきた神奈子達に預ける。

「はっはっは！早苗が気絶したか。桜火も強くなったなあ」

「関心してる場合じゃないでしょ！神奈子！」

俺のそばでいきなりケンカし始める神奈子と諏訪子。この戦いに巻き込まれたらかなり疲れそうだったので、桜火はその場所を離れた。

3（後書き）

学校の行事とかで、1週間ほど休みます。
たぶん再来週の月曜には復活します。

4（前書き）

やっと復活です。

久しぶりの投稿なので、もともと無いクオリティがさらになくなっていきます。

神奈子達から離れ、俺は咲夜達のもとに戻っていた。すると咲夜は、理子とジャンヌにスペルカードルールについて説明しているところだった。

「これで早苗もなかなか起きないだろう。さっさと咲夜の依頼を終わらせよう」

確か、ティーカップだったよな？

「咲夜、こっちは終わったぞ」

咲夜達のもとに戻ると、理子とジャンヌが関心の目で見てくる。

咲夜、余計なことまで話したな？

「咲夜、能力まで話したな？」

「もちろんですわ」

おいおい、こっちも色々と苦労してるんだぞ？まだ不気味がられてないだけまし…おい、不気味がられてない？

不意に思いつき、理子達の前で能力を使ってみた。

「ほらよ、頼まれたティーカップだ」

試しに目の前でティーカップを創造させてみる。大丈夫そうだが、むしろ関心のまなざしを感じる…

「あのな、理子、ジャンヌ、この能力は外では5つまでが最高だ。

それまで便利な能力じゃないからな。それに俺の血に妖怪の血が少し入っていることも聞いたな？」

「うん、それも聞いたよ。それでも十分反則級だし、色々とチートじゃない？」

「反則というより、お前は人間か？」

いや、人間じゃないですけど。一応妖怪の血が入ってるがな。

それより問題なのは能力だ。もし理子かジャンヌからSSRに言われてらどうしようもないし、それ以前に藍の存在も危うい。もし藍が幻想郷に戻るようになったら自分から来ていた藍が可哀そうだ

ろっ。

「俺は一応人間だ。妖怪の血って言うってもほんの少しだからこつちでは十分人間としていられる。後お前ら、俺の能力を絶対にSSRに話すなよ？いきなりSSRに転科なんてしたくない」

俺達が話していると、今度は咲夜が不思議な顔をしていた。

あれ？俺なんか言ったかな？

「ねえ、そのSSR？って言うのは何なのよ」

やば、なんか地雷踏んだ気がする…

「SSRって言うのは、超能力を持った人間が集まるところなのですよ」

えっほんと、理子が胸を張る。止める理子、お前はありすぎるから咲夜に殺され――

「っておい咲夜！なんでいきなり俺にナイフを投げてる！？」

ちょ、まさか読心術！？

そして俺はいきなり飛んできたナイフをよけながら考える。

「ちよつと何か失礼な念を感じたから…」

あぶねえ。俺が今のを口に出してたら俺は全身ナイフまみれだったぞ。

咲夜の怖さに再度驚きつつ、咲夜のナイフを避けていると、近くにいた幽々子が助けてくれた。

「ちよつと！？何するんですか西行寺幽々子！」

「あらあら～私はただお土産を守っただけよ～？」

やっぱり土産目的か…

そう言っつて扇子で口元を隠す幽々子。本心が駄々漏れた。

「すまなかったな、幽々子。それと、これは土産だ。妖夢と一緒に食べてくれ」

「あら、ありがとね～」

桜火が渡した大量のお菓子を持ちながら、どこかへ飛んでいく幽々子。結局妖夢の分は残さないであろうから、妖夢の分は確保済みだ。

…幽々子、なんで太らないんだろうなあ…これって十分異変じゃね？

そんなことを呑気に考えていると、後ろから飛んでくるナイフを察知し、はたき落とす。そこには咲夜の姿が…

「無い！？」

そう言っ探すと、さっきまで自分のいた方向に気配が…

「時止めとかチートだろ…」

「あら、桜火さんも出来るでしょう？」

時を止めて俺の後ろに立っていた咲夜に首を掴まれていた。
やべえ、この状況を逃げ出す方法考えねえと！

1 咲夜を振り切る——間違っ傷つけるかもしれない。却下。

2 能力でスキマを開き逃走——理子達を置いていくことになる。
却下。

3 どうにかなだめる——それくらいで出来たら苦労はしない。却下。

…どれもまともなのがねえ…！

「…咲夜、このままどうするつもりだ？」

俺は念のためどうするかを聞いておく。多分起こることは大体分かっているが…

「決まってるじゃない。紅魔館に連れていくのよ」

止めてくれ！昔同様フ란の相手しないといけないから！俺はただ死にたくない！

そこで俺の逃走劇は始まった…

4（後書き）

余裕がなかったなので短めです。

キャラ同士の対話コーナーは今回はないです。余裕があれば次書きます。

「ちょ、危ねえ！」

俺はギリギリのところまで飛んでくるナイフをかわす。これは本物であり、当たると死ぬか確実に傷を負うのでかわさないといけない。幻想郷では普通、命にかかわるようなことはしてはいけないので、周りに被害の出ないようにナイフを叩き落としてはいるが、それでも周りにはナイフが飛んでいき、理子とジャンヌがそこら辺を落としている。

「至急『妖怪の賢者』！」

このままでは逃げきれないので、スペルを使って紫を呼び出す。

「いきなり何、桜火？」

「すまん。ちよつと咲夜の理性の境界いじって元に戻してくれないか？ じゃないと俺が死ぬ」

紫を呼び出した理由はただ一つ。咲夜を落ち着かせるためだ。そして咲夜が完全に落ち着いたところで、

「咲夜、紅魔館にはこっちにいる間に一回は行くから待ってる。その前に俺の友達の家内をさせてくれ」

…ふう、これにて終了。地獄は回避された。

「すまん。理子、ジャンヌ。かなり驚いただろ、ナイフの処理もありがとな」

「あれで驚かん奴はいないと思うが…」

「おうくん！ 次あんなことさせたらぶんぶん、がおくだぞ！」

こいつらがこんな奴らでよかった。余計な心配を掛けずに済む。

「次はさっきのポテチをかなり取って行った亡霊であり、冥界の女王の幽々子の場所に行くぞ」

そう言っただけで俺達は博霊神社の中央、おもにいつも盛り上がっている場所へ向かった。

「やっぱいつもここが盛り上がってるな…」

宴会の中で一番人がいるとはいえ、さすがに集まりすぎではないのだろうか、と思うほどの人数がいる中、桜火、理子、ジャンヌは途方に暮れていた。

人多すぎじゃない？ほら、神社から出てきた霊夢だって顔しかめてるし。あ、妖夢発見。ついでにキンジもいるな…多分お互い苦労人としての愚痴でも言ってるんだろう。混ざりたいけど我慢しよう。妖夢がいるってことは、近くに幽々子がいるはずなんだが…いた。なんか周りにある大量の皿は無視しよう。

「幽々子。さつきは特に挨拶も無かったしな、改めて久しぶり。幽々子、こっちが俺の向こうの友達、峰理子とジャンヌ・ダルクだ。理子、ジャンヌ、この大食いが冥界の姫、西行寺幽々子だ」

三人に紹介をすませると、俺は一人でキンジの場所へ向かった。

「ようキンジ、妖夢をナンパか？」

完全に分かっていながら茶化す。だいたいこの後に反応するキンジと妖夢の顔が思い浮かび、少し笑ってしまう。

「「ちょ！？なに言ってるんだ（ですか）桜火さん！？」」

「いや、仲良く話してたからついからかっただけ」

もちろんこの二人がこの反応をするのは予想済み。

そこで俺は妖夢に土産を渡していなかったことに気づき、妖夢に土産を渡す。

「それより妖夢。お前に土産だ。幽々子に渡しておく確実に食われるからな。確保しておいた」

そう言って渡してやると、妖夢は涙目になって受け取る。…何だろう、捨てられた子犬を拾った感じがする。

普段から土産がもらえてないんだな…今度からはきちんと持ってきてやろう。

そう思って、周りに一番うるさい誰かがいないと思って見渡すと、アリアがいなかったので、キンジに聞いてみる。

「それよりキンジ、アリアはどうした？一緒に行動してただろ？」

ここでキンジからの返答に、俺は目を丸くした。

5（後書き）

作「執筆時間をくれ」

桜「んじゃリライトやめれ」

作「だいぶ終わったんでストック書きに入ります。次回はアリアと合流すると思うぜ！」

桜「期待はするな！」

作・桜「それではまた次回」

6（前書き）

すっかり忘れていたテスト、勉強をしていなかったショックと、テストの点数に絶望した結果一週間も休んでしまいました。本当にごめんなさい（見てる人なんていないでしょうけど）。

これからまた、どうでもいい話を書き始めます、期待はしないでください。

キンジには足を聞くと、アリアはメイド服を着た金髪の少女について行ったらしい。もちろん金髪のメイド服はこの幻想郷には1人しかいない。霧雨魔理沙、普通の魔法使いを名乗り、おもに光や熱の魔法を得意としているが、このごろ人形の扱いを習ったという。大方、人形を使ってアリアを連れだしたんだろうが、キンジに見られていたのは誤算だな、魔理沙。

「それでキンジ、そいつはどこへ行った？」

「確か、神社の裏の…森に行った気がする」

森か…確かこの森を進んでいくと、途中から魔法の森に繋がらなかったか？

「キンジ、俺はアリアを探してくるから、一応みんなにあいさつをしてこいよ。一応、翼の生えた少女たち以外はまともな奴だからさ」

「分かった。んじゃ、妖夢、だったか？また愚痴を聞いてくれ」

「いえ！こつちもまた聞いてください！」

なんかやけにキンジと妖夢が仲良くなってるな…後で文に情報リークしとこ。

そんなどうでもいいことを考えながら、俺は森へと入って行った。

「なかなかうまく行ったな。これなら外の情報も上手く聞き出せるつても——」

「そうだといいな。魔理沙」

森に入ると、すぐに魔理沙は見つかった。その先にアリアがいるのは分かっているのだが、先にこつちを片付けよう。

「桜火！？お前、いつから此処に！？」

「ついさっきだ。それより、外の事なら俺に聞いてくれればいいだろ？なんでアイツにする？」

「それは、何か特別な方法で聞き出す方が面白いからだ！」

何だこいつは、数年の間に頭がおかしくなったか？

俺は能力でハリセンを作り出し、魔理沙の頭を叩く。

「うお！痛いな！」

「それなら自分の行動に反省しろ。ただの人が森に入って妖怪にでも襲われたらどうするつもりだった？」

「これでピチュらせるんだぜ！」

そう言っつて魔理沙は八卦炉を頭上に掲げる。

「お前は精密な狙いが付けられんだろうが。今までに何回紫の家をそれで吹っ飛ばした？」

こいつは春雪異変解決の時に、家に来て俺と弾幕勝負をしていたが、狙いが付けられず、家をふっ飛ばしやがった。それも3度も。一応俺が能力で元に戻したが、戻さなかったらスキマツアーじゃ帰れなかったな。

「えと…5回くらい？」

さらに増えてやがった。

「と言う訳だ。それにアイツも襲われたらしいしな。マスパとその他魔砲は禁止な」

「分かったんだぜ！星符『スターダストレヴアリエ』！」

スペルカードを使い魔理沙は先に現場へ行った。

現場に駆け付けると、アリアは小く中級妖怪相手に、銃を構えて休んでいた。

「アリア止める！こっちでは火器は禁止だ！」

「遅いじゃない桜火！さっさと来なさいよ！」

それは無理な話だ。

見ると、魔理沙は多分小妖怪に、追いつこうとしていた。

「あいつ、速いな」

スピードは魔理沙と同じくらいと思われる。魔理沙も当てきれないか…

「アリア、さがってる」

俺は能力でU・Sライフルを作り出すと、妖怪に構える。

「あんだ、今何やったの？」

「俺の能力。まあ、それほど便利じゃないがな」

妖怪の動きを見ると、大体パターン化することができた。俺は進行予想地点に照準を合わせると、引き金を引いた。

「銃符『桜の枝』」

撃つと同時にスperlカードを発動し、弾を幾千にも別れさせる。

そして狙撃地点をほぼ360°。囲んだところで、妖怪が狙撃地点に入り込む。すると、そこに向かってすべての弾が集まり相手は被弾する。この間わずか0・1秒。

「さ、アリア。戻るぞ——」

言っている途中で振り向くと、そこにアリアはおらず、足元にスキマが残っていた。

はあ…また紫か。

そう思いながら、俺は神社へ戻った。

6（後書き）

桜「結局量は増えてなえな！おい！」

作「マジすいません、テストのショックから逃げられなかったんです」

桜「テスト？筆記問題なら5教科で400点以上は余裕だろ？」

作「ああ、自分で作ったキャラなのに殴りたい…！」

桜「したらPCが壊れるぞ。それより次回だ」

作「次回ねえ…たぶん少しキンクリすると思うぞ」

桜「きちんと書けばそれでいい」

作「まあ、期待はしないでね」

桜「誰も知らないから大丈夫だ。読んでる人に告ぐ、余裕があれば感想を書いてくれ」

作「かなり元気になるからな…あれ…」

桜「作者に鬱が入ってきたぞ…それでは、また次回」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7056w/>

緋弾と無限剣

2011年11月16日18時49分発行